

アーチェリーの発達について

鈴木 正

目 次

- I. はじめに
- II. Archery とは
- III. 弓の歴史
- IV. 弓術に因んだ Family names
- V. イギリスのアーチェリー
- VI. アメリカのアーチェリー
- VII. 日本におけるアーチェリー
 - (1) 在米邦人の貢献
 - (2) 日米親善通信競技大会
 - (3) 菅重義, 小沼英治等の尽力「日本洋弓会」の誕生…黎明期
 - (4) 「日本アーチェリー協会」と改称…普及発達期
 - (5) 日本のフィールド・アーチェリー
- VIII. むすび
- IX. アーチェリー解説年表

I. はじめに

昭和 12 年から 14 年にかけて日本に紹介¹⁾, 導入され, 普及しはじめた日本でのアーチェリーは, 第 2 次大戦の影響をうけて, 一時期中断されたが, 終戦後, 同好の人達の努力によって, 昭和 22 年 3 月に日本洋弓会が創立され, 本格的な普及にのり出した. このような状態で, 諸外国に比し遅れながらの出発であったが, 今やどうやらその遅れをとりもどし成長, 充実期に至っている. しかしアメリカにはまだ数歩遅れている状況にあり, ヨーロッパ諸国とはやっとう肩を並べるまでになってきた.

日本で最近商業ベースにのってたいへん隆盛を極めたのはボーリングであったが、これもどうやらそのピークを過ぎた感があり、それにとって代ろうとしているのがアーチェリーだと言われている。すなわち昭和 47 年 10 月 5 日の読売新聞に、「秋風吹込むボーリング」と題して、“縮小される売り場，ボウルや靴の売れ行きバッタリ，隣りにアーチェリー用品が陳列されているのも時代の波か”とか，“ピークは 1 昨年，この 4 月頃から売行きが目立って減った。売り場を減らした分はアーチェリー売場の増設にしたが，こちらの方の売れ行きは上々”という記事があった。ターゲット・アーチェリーに加えて，今後はフィールド・アーチェリーが進出してくるものと思われる。

世界アーチェリー選手権大会への日本選手参加状況

回数	開催年次	開催地	日本代表選手	日本選手の成績
第21回	1961年 昭36	ノルウェー オスロー	小山高茂監督 金子清則(マネージャー) 小野忠彦(チームドクター) 亀井，岸野，入江，	亀井 55 位 岸野 66 位 入江 70 位 (126 名中) (参加国 15 中 13 位)
22	1963 昭38	フィンランド ヘルシンキ	細井英彦監督(早大出)25歳 寺田五郎(浜松高枝出)30 岸野計二(浜松高商出)29 末田実(大阪府立大出)21 猪股英毅(慶応大)21	団体 10 位 個人 猪股 24 位
24	1967 42	オランダ アメルス フォルト	細井英彦監督 末田，前田，木村，円城寺， 松島，塩屋(和弓)宮田	団体 7 位 個人 末田 24 位 前田 27 位 円城寺 20 位
25	1969 44	アメリカ・ ペンシルバ ニア州 バレーフ ォルジ	山田団長，高柳監督，高橋 マネージャー 前田，村上，木下，道永， 川西 女子 西，谷，平田	団体 { 男 8 位 女 7 位 個人 { 男 村上 21 位 女 谷まゆみ 5 位
26	1971 46	イギリス ヨーク市	前田，梶川，中本，村上， 若槻 女子 布浦，渡辺，中島	団体 { 男 7 位 女 9 位 個人 梶川 5 位

弓の発明は非常に古く、はじめは、狩猟や武器として大いに利用されたが、14世紀頃火器の発明を見てからは、狩猟や武器としての価値を全く失い、代ってスポーツとして愛好されるようになり、今日に至っている。

近代オリンピック競技が復活してからは、第2回パリ大会(1800年、明治33年)、第3回セントルイス大会、第4回ロンドン大会、第7回アントワープ大会等ですで行なわれ²⁾、昨年の第20回ミュンヘン大会には日本からも男子3名女子1名の選手が出場している。

また現在は、2年に1回世界アーチェリー選手権大会がFITA(国際アーチェリー連盟)加盟国のみの参加で開催されており、日本選手団も1961年(昭和36年)の初参加以来、前表のような参加をしている。

FITAは1931年にイギリスを中心として設立され、同年に第1回のワールド・チャンピオンシップが行なわれ、以後毎年のように選手権が行なわれていたが、1939年から1946年までブランクがあり、1959年からは2年に1回行なうことになった。

こうした大会のほか、手紙や電報で通信しながら、外国選手と競技を交換するメール・マッチ(mail match)も行なわれている。

この小論においては、弓の発生から、スポーツとしてのアーチェリーの発達、日本におけるアーチェリーの歴史について述べてみたいと思う。

II. Archery とは

Archeryという言葉は元来、弓という意味であるラテン語の「arcus」から来ている³⁾(The term “archery” comes from the Latin arcus, a bow, ……). 羅和辞典で arcus をひいてみると、弓、弓型、虹、凱旋門などの意があることがわかる。フランス語でも arc には弓形の意があり、英語のアーク灯(arc lamp)、電弧(electric arc)という用い方でもよく知られている。さらに弓形をアーチ(arch)というのはすでに日本語化した状態であり、アーチ橋とか、ダムアーチ型

とか、運動会での入場門（緑門）などもすべて弓型という意味で用いられ、アーケード（arcade、ドイツ語では Arkade）は、柱列に支えられたアーチの連続したもので商店街に屋根をつけたものを言っている。

道具としての弓は、英語で Bow と言い、ドイツ語では Bogen である。スキーでシュテムボーゲン（Stemmbogen 半制動回転）というのは、片脚で制動をかけながら弓型に湾曲したシュプールを描いて滑べる回転のしかたである。

archery となれば、弓で矢を引くことの意味であり、「弓術」とか「弓技」という日本語に訳すのが正しく、その意味からすれば、日本の弓道すなわち和弓も、アジア諸国の弓術もすべて、アーチェリーと言わなければならないはずである。

しかし現在の日本で言われているアーチェリーとは、日本の弓（和弓）に対して、西洋の弓術（洋弓）を意味しているのである。

もともと洋弓は、地中海周辺の国に発生し、ヨーロッパ特に北欧、イギリスなどに発展し、アメリカに渡って著しい進歩をみせた弓術であり、日本の礼儀と精神を重んずる和弓とは、弓の大きさ、構造、形、射法などにおいて大いに異なる点がある。このアーチェリーと和弓の違いは、ちょうどフェンシングと剣道、またはレスリングと柔道の違いと同族異質の関係にあると田中良一氏（全日本アーチェリー連盟理事長）は述べている⁴⁾。アーチェリーも和弓も身体活動の原理は同じであるが、アーチェリーは科学的、合理的に考案されたスポーツであり、日本弓道は東洋的精神面を重視し特に「射は立禅」（座禅に比して）といわれるくらいの評価をうけている。理論的には、アーチェリーの技術面は割合簡単であるが、心理面からみた場合射的のむずかしさは無限ともいふべきものがある。

1972年の第20回夏季オリンピック大会（ミュンヘン）の競技種目にアーチェリーが加えられ日本からも、男子3名、女子1名の選手を送ったことは周知のことであるが、アーチェリーがオリンピックの競

技種目としてとり上げられたのは、すでに古く、第2回パリ大会(1800年、明治33年)の時男子のみ、第3回セントルイス大会(1904)、第4回ロンドン大会(1908)、第7回アントワープ大会とに行なわれている。

第20回オリンピック・ミュンヘン大会アーチェリー成績(2880点満点)

順位	男 子			女 子		
	氏 名	国 名	得 点	氏 名	国 名	得 点
1	ウィリアムス	アメリカ	2528	ウィルバー	アメリカ	2424
2	ヤルビン	スウェーデン	2481	シドロフスカ	ポーランド	2407
3	ラーソネン	フィンランド	2467	ガブチュンコ	ソ 連	2403
4	コニオー	ベルギー	2445	ロサベリジュ	ソ 連	2402
5	エリエイソン	アメリカ	2438	マイヤーズ	アメリカ	2385
6	ジャクソン	カナダ	2437	マチンスカ	ポーランド	2371
(19)	梶川 博	日 本	2381	(17) 秋山芳子	日 本	2301
(29)	日比野正嗣	日 本	2344			
(38)	中本新二	日 本	2287			

ミュンヘン大会では、男女ともアメリカが優勝し、日本選手の成績はかんばしくなかった。参考までにその結果を表示してみよう。

III. 弓の歴史

人間の歴史と弓の歴史は、そのはじめから切り離しては考えられない。すなわち、人類発生後間もなく弓矢が発明されたのであろうと考えられるが、その起源はきわめて古く、明らかにわかっていないが考古学者達の研究によれば、ネアンデルタール(Neanderthal)の、ある種族たちは、すでに10万年以上も前に、弓矢を狩猟のために使用していたと推定されている⁵⁾。

原始人や直立猿人たちは、弓矢を使用しなかったと言われており、英国の先史考古学者 Vere Gordon Childe (1892—1957) 著の「文明の起源」には、人類が投槍器や弓を発明したのは、おそらく後期石器時代(1—3万年前)であろうと述べている。

Encyclopedia Britanica には、弓の発明は、少くとも3万年前か、お

そらくはもっと古く、ほとんど5万年ほど前であろうと述べてある⁶⁾。イベリア半島スペインの北部サンタンデル Santander 近郊のカンタブリア山脈 (Cantabrian Mts.) にあるアルタミラ洞窟 (Altamira) の中にかなり発達した弓を引いている壁画が残されているが、これは約1万数千年以前のものでと推定され、現在の史実としては最も古いものとされている。また2万5千年前にアメリカ大陸の南西部を放浪したフォルサム人 (Folsom) 達は、非常に優秀な狩猟人であり、射手でもあった。彼らが、かつて荒野で野牛 (Buffalo) を矢で射止めた記録は、今日、全く絶滅したアメリカ野牛の肋骨の中に打ち込まれた石の鏃によって確認されているということである⁷⁾。

弓矢の発明が、明らかに人類の歴史における文化的大進歩であり、これは、火の発見、車の発明、言語の発達等とならんで非常に重要なことであった。それは、弓の発明以前は、人間は決して野獣よりも優位に立っていたとは言えなかったのであり、この意味からも弓矢の発明は人類の生存に大きな影響を及ぼしたといえることができる。

以上のことから、弓矢は、旧石器時代の末期に、中近東、アジア地方の民族が発明し、新石器時代 (日本では縄文式文化時代、B. C. 4000年頃) にはいって、盛んに使用されるようになり、狩猟や漁獲の道具として生活の糧を得るための必需用具となり、のちには外敵防御の武器としての価値も大となったことがわかる。2輪戦車や馬に乗った優れた戦士が尊重され、ギリシャ人やローマ人は、金銭づくで東洋から騎射の上手な戦士を雇ったこともあった⁸⁾。さらにスポーツとしても古く、大昔の中国では、アーチェリーの手腕を尊重し、しばしばアーチェリーコンテストを開いたという記録もある⁹⁾。

オーストラリアの1部やタスマニア島 (Tasmania) では弓を知らなかった民族があったと言われているが、R. P. Elmer 博士は、長さ1フィートの矢がオーストラリアで発見されたことから、異議を唱え、それは地上からずっと以前に姿を消した種族のものであろうと表明している。

エルマア博士の調査では、おそらく1万5千年ぐらい前に存在して

いたオーリナシアン (Aurignacians) 民族が最初に弓矢を使ったのだろうと述べている。

全世界のほとんどの種族が他民族からの刺激なしに、それぞれ特徴ある弓矢を考案したのだろうという結論におちついている。そしてその射法も、はじめは自然発生的な原始的射法とでもいうべきものであったようだ。そこで世界各地の射法の発達のしかたを系統的に大別してみると、下記の三つの系統に分けられる。

1. Mediterranean form (地中海型射法)

いわゆる洋弓型射法で、欧米諸国に発達したものである。弓を左手に持ち、矢を弓の左側におき、矢筈を弦につがえ、右手の人差指と中指の間にはさんで、さらに薬指を中指に添え、この三指の指先をまげて弦を引く射法である。現在の洋弓のフォームは、メディタレニアン・スタイルに類し、フィールド・アーチェリー (狩猟を競技化した試合方法)、ハンティング、フィッシング・アーチェリーなどには、伝統的な射型に基づくハイ・アンカー射法が用いられ、精密な照準、正確な中を要求されるターゲット・アーチェリー (標的競技) では試合のためのフォームであるロー・アンカー射法が考案されている。

2. Mongolian form (蒙古方式射法)

アジャ民族の射法で、日本弓の射法もこれに類する。この射法は弓を左手に持ち、矢を弓の右側におき、右手の親指の腹を弦に当て、人差指、中指 (または薬指も) を親指の上に添えて弦を引く方法である。中国では大きい長い弓を使用する民族を大と弓の二字を合せて夷 (い) と呼ぶようになった¹⁰⁾。

3. Pinch draw style (つまみ引き方式)

原始的なもので、未開の土人の間に現存しており、射法というほどの一定の法則はない土人の弓の射法である。

IV. 弓術に因んだ family names

アーチェリーが、英国や米国において、いかにその生活と密着していたかという点について、Encyclopedia Britanica (巻Ⅱ 293 頁) に、

「Its importance in man's scheme of living is attested by many family names — Archer, Arrowsmith, Bowman, Bownocker, Butts, Fletcher, Stringer, Yeoman — that have their origin in archery.」
と述べてある。最初の Its は、前文をうけて The bow を指しているのだが、実際に bow (アーチェリー) に起因して、このような苗字があるかどうかを、英米それぞれの代表的な人名辞典で調べてみると、
The Dictionary of National Biography (Oxford University Press, 1917→'64) では、

Archer	11 名
Arrowsmith	3 名
Bowman	5 名
Bowyer	4 名
Butts	3 名
Fletcher	24 名 (うちスイス人1名)
Bownocker, Stringer, Yeoman,	なし

Concise Dictionary of American Biography (Charles Scribner's Sons, New York. 1964) には、

Archer	7 名 (うち1名は Oxford 生まれ)
Bowman	2 名
Butts	1 名
Fletcher	12 名 (うち2名 England 生まれ, 1名 Cuba 生まれ)
Yeomans	1 名
Arrowsmith, Bownocker, Bowyer, Stringer	なし

以上の如き実数であるが、人名辞典に掲載されているのは相当な知名人であることからして、こうした弓に因んだ姓は、随分多いのであろう。人間の生活組織の中に弓がいかに入り込んでいたかということがうかがわれる証拠でもある。

蛇足ながら、これらの姓 (family names) を日本流に解釈してみれば、

Archer 射人, 射手, 弓射る人.

Arrowsmith 矢人, 箭工, 矢造り師.

Bowman 弓術家, 弓の射手.

Bownocker nock には弓筈(弓の両端の弦をかける部分, 弭, ゆはず)と矢筈(矢の弦にかける部分)の二つがあるが, Bownocker となれば, 矢つがえ人の意で, 弓を準備する人ともとれるし, 射手と解してもよいであろう.

Bowyer 弓師, 弓屋の意味もあり, 弓人, 弓術家の意味もある.

Butts 射槊(しゃだ, 土を高く盛っての的をおく所) あづち(安土, 棚), 的の山, 標的等の意で標的をおくために盛り土した所のこと.

Fletcher, Fletch は矢羽をつけることで, 矢羽職人, 矢製造人のこと, 現在ではフレッチャーとは, 羽根を矢に接着する時使う特殊の器具の名称である.

Stringer string は弓の弦(つる)のことだから, 弦製造師, 弦張り人.

Yeoman 番卒, 衛士, 下士官, 騎馬義勇兵等の意があり, 弓を片手に持った王家, 貴族の従者といったところであろう.

V. イギリスのアーチェリー

太古において, 生活と防御の手段に使われていた弓は, イギリスでも各国と同様に火器の発明以前には, 重要な武器であった.

古代のブリトン人(Britons)が弓を使っていたかどうかは不明だが, サクソン人(Saxon)がブリトン人を征服した時には, 弓矢の威力にものをいわせたことはよく知られている.

古代ウェールズ人(Weles)の弓に関しては, バリ(Gerald de Barry)が書いた「ウェールズ族日記 Itinerary of Welles」の中に次のような一節がある.

「ウェールズ人の弓は, 角や, 白木やイチイ材で作られるのではなく, 楡の木で作られる. それは美しくもなく, 磨きあげてもなく, 反対に粗野で不恰好である. しかし, それは堅くて強い. それは遠方へ

射るためではなく、接戦において強大な打撃をあたえるように工夫されてある。」と。

またアメリカのインディアナ州にあるノートルダム大学 (Notre Dame) の比較言語学教授 (Gaelic scholar ゲール語学者) であった、マクマレー博士 (Austin Macmalley) が、ロバート・エルマー博士 (Dr. Robert P. Elmer, アーチェリーの歴史研究の世界的権威者であり、Archery なる著書がある。また優れた射手でもあり、1911 年、1913 年と 2 回アメリカンラウンドで優勝の栄冠を獲得したことがある。) に書き渡した手記の中に、次のような一節がある。

『アイルランド人の古い中世記の名称はスコット Scot であった。スコットランド高地は、アイルランドの植民地であった。「スコット」という珍しい名称はアイルランドでは死滅したが、スコットランドにおいては残った。「スコット」の語源は「スキオト Sciot」すなわち「弓人」で、これにつながるのは「スキタイ人 Skytte」、古英語の「スキット Skytte」などである。スコットランド人はすなわち弓人である。ドイツ語の「スクッテン Scutten」すなわち弓人を参照せよ』と。

アイルランド人は弓とともに投げ槍も使った。使用した弓は短くて、矢も小型であったといわれている。すなわちアイルランド弓は(その気質と同様に)短くて速いということは、詩人のスペンサー (Edmund Spenser) も「アイルランド国所見 View of the State of Ireland 1594 刊」の中で述べている。そして、デューラ (Albrecht Durer) の武器をかつぐアイルランド人の弓兵の絵でも弓は 5 フィート、矢は 2 フィート位の長さ描かれている。

サクソン人の使った弓も短かったと書いてあるものが多い。このことについては、1912 年の「弓人年鑑 Archers Pegister」に、「弓はだいたいにおいて非常に立派に保存されており、あるものは新品のように見える。これらは長さ 5.7 から 6 フィート (170—180 cm) で、直径は 2.8 から 3 cm、両端が先尖りになっており……」と以下弓の材料、弦、矢などについてたいへん詳細に述べてある。しかし 5—6 フィー

トといえば短弓とはいえない。

スウェーデンには、古代の岩石の浮彫に、弓を射る人間を彫ったものが残っているが、身長から比較して見ると、その弓の長さは3フィート位であると考えられる。

イギリスではじめて騎馬兵に弓を持たせ、射程距離を延長させたのは1360年で、その後フランスとの戦いで、その効果によって大勝を得たのであったが、馬上の射手の使った弓も短いものであったことは、多くの絵から推測される。

弓が軍隊の重要な武器であった時代には、統治者は弓の使用を奨励し、平和時の訓練がそのまま戦時に効力を発揮するので、市民に対して武器携帯を許したことはいうまでもない。英国の歴史をみると、たびたび法律によって強力に弓術を奨励し、用具の適正な供給を確保するための法規が公布されていたことがわかる。そのうち主なものを挙げてみると、次のようなものがある。

1275年エドワード1世の時のウィントン法令（ウィンチェスター法令）。その大要は、一定の身分以下の男子はすべて7歳から射弓することを強制し、また外国と貿易をする商人に対しては良質木材の弓材を、商品1トンに対して4本、白葡萄酒大樽1個について10本を抱き合わせてイギリスに輸入する義務を負わせたのである。これは法令中重要なものの一つで、その後数百年にわたって施行されて来た。

エドワード3世時代の1341年に「弓及び供給法令」、1346年に「弓術実施奨励法」、1363年に「弓術実施、その他の遊戯の禁止」が出された。

リチャード2世時代の1382年には「執政長官矢を供給すべき件」、1389年に「官吏弓矢を用うべきこと」、1392年に「王国官吏弓術を實踐すべき件」が発令された。

ヘンリー4世の1413年には「矢尻改良の件」が出された。

ヘンリー5世時代の1416年には「ケント州及びその他の長官羽根を供給すべき件」、1418年に「14州の長官羽根4万枚を供給すべき件」。

エドワード4世時代の1465年には「矢に適するアスブ材を以て木靴を作るべからざる件」、1466年に「アイルランド弓術の件」これはペイル Pale 地方（アイルランドの東部地域で12世紀からイングランドの統治下となっていた）にいるアイルランド人に対するもので、的場を構築すること、3月はじめから7月終りまでの間、聖日には16歳から60歳までの者全部が弓を射るべきこと、というものであった。1473年に「弓用材を商品と抱き合せにて輸入すべき件」、1474年に「弓及び矢を製作の件」、1478年に「不法遊戯禁止、弓使用の件」、1483年に「弓の価格統制」が発せられた。

リチャード3世の1483年には「弓用材を葡萄酒大樽と抱き合せに輸入すべき件」、そしてこの年には、イチイ材の弓の価格を3シリング4ペンス以上にはならぬことが定められ、これが17世紀初頭にいたるまで標準価格として守られたのであった。

ヘンリー7世時代の1488年には「長弓価格規正」、1504年には「上質弓材関税免除」、1504年に「石弓使用禁止」の令が出された。

ヘンリー8世時代の1512年には「60歳未満者弓を射るべき件」。これは1512年の弓術実施令の再公布で、7歳から60歳までの者全部に対して日曜日と聖日に弓を射ることを命じたものである。1546年には「石弓射撃禁止」、1546年には「弓術奨励法」が出された。

メアリー女王 (Mary) の1557年に「ウイントン法令廃止並びに再公布」。

エリザベス女王時代の1566年に「製弓師及び弓価格公定に関する法令」、1571年に「弓用材輸入に関する件」が発令された。

ジェームス1世の1603年に「1566年法令継続の件」、1606年には「ロンドン付近射的場修理の件」が出されている。

チャールズ1世時代には、1628年に「前記法令継続の件」、1629年に「弓術強制委員任命」、1632年に「フィンスベリー弓場復活の件」、1633年「槍弓併用の件」が出ている。

チャールズ2世の1672年に「弓用材の関税120本につき4ポンドに決定の件」が出されている。

以上のほか、スコットランドのジェームス1世（彼は弓人としても詩人としてもすぐれていたという）は、1424年に、イングランドの法規からヒントを得て、「12歳以上の者はすべて弓を習え、時価10ポンドの土地ごとに的場をつくれ、とくに教会に近いところを選べ、そして休日には人民全部弓を練習せよ、練習しない者には罰として羊を納めしめよ」と訓令している。

以上のように、イギリスでは13世紀から17世紀まで約400年の間、代々の各王が法規によって武器としての弓を保護し、国民に弓術を時には強制的に練習させたのであった。

この間、王みずからも弓をひき、その技術にすぐれていた人も少くはなかった。王室血統の男子の教育には、あらゆる種類の武器を使える技能について重要な部分を占めていたことはいままでもない。

イギリスにおけるスポーツとしてのアーチェリー

イギリスでは長い間武術としての重要さから弓術を奨励し、弓具材料の輸入を法規によって保護してきたが、これが娯楽、スポーツとしてのアーチェリーに移行して行くわけであるが、その移行の最初のきっかけは、1538年にヘンリー8世がアーチェリーを娯楽として、その大会を開いたときからとみることができる。この年に弓人協会が設立され、王室の認可は、ヘンリー8世自ら公布したもので、これは軍人兵士の団体ではなくて、スポーツを目的としたものであった。この認可書の全文は1682年に出版されたWilliam Wood著の「弓人の栄光」(The Bowman's Glory)に載せられているということである。

イギリスのこのような動きを反映して、ヨーロッパの各国にもアーチェリーがスポーツとして台頭する気運がみられるようになった。

イギリスで民間に弓術の団体が最初にできたのは、これよりもさらに200年も古く1482年の時であった。これは弓は射的であるため民衆の勝負ごとから始まったもので、野鳥を射つことには厳重な制限があったため、一番はじめは、スコットランドの小さい町キルウィニング(Kilwinning)で毎年1回おこなわれたパビンゴ射撃大会であ

った。バピンゴ (Papingo) とは、おおむの形をした的で、これを柱の上において射ったものである。

エドワード 6 世 (在位 1547—1553) のつけた日記が、大英博物館に残されているが、その中に彼が若い頃参加した弓術射会についての記録が多く残っているという。ヘンリー 7 世、8 世はすぐれた弓人であったし、女王も弓の使い方を習ったり、鹿を射ったという記録もいくつか残っているということである。

チャールズ 2 世 (在位 1630—1685) も弓術に対して、非常に好意をもっていてスポーツとして奨励し、自らも「聖セバスチアン友愛会」の会員と一緒に射弓していた。

チャールズ 2 世 (1630—1685) の妃キャサリン Catherine (1638—1705, Catherine of Braganza queen consort of Charles II. ポルトガルの John IV の娘) もまた熱心にアーチェリークラブの形成を推奨し、チャンピオンになった者には、“Marshal of the Fraternity of Archery” (アーチェリー同好会の元帥) と表現される銀の楯を授与した。このため英国内はもちろん他のヨーロッパ諸国にも、このスポーツに心からの賛成を送るものが多く、以後 17, 18, 19 世紀にかけて盛んになっていった。

したがって地元イギリスでは、1673 年にヨークシャーの熱心な人によって、小さなグループ「Ancient Scorton Arrow」コンテストがおこなわれ、勝者には銀製の小さな弓を賞品として与えられた。このコンテストは、今続いているアーチェリーの競技の中で最も古いものとなっている。

チャールズ 2 世 (在位 1630—1685) までは、イギリスの弓術は王室の庇護が続いていたが、その後この庇護がなくなったので次第に衰え、1787 年 (この年 6 月 18 日に愛弓者会が発足……これについては後述) までの約 100 年間はまったくふるわなかった。その理由は、クロンウェル (Cromwell, Oliver 1599—1658) の清教徒革命の後であり、英国は共和制が施行され、父の後を継いで第 2 代護国卿 (Lord Protector of the Commonwealth) となった Cromwell Richard (1626—1712) は、

生えぬきのピューリタンであったので、当時、勝負事みの娯楽におちいていた弓技には好意を持ち得なかったので、これを奨励するという事もなかった。そうした世相の中に育って、その後の王位についたジェームス2世（在位 1685—1688）はもちろん弓術に全く関心を示さなかったのはむしろ当然のことと言えよう。

チャールズ2世（1630—1685）後約 100 年間低調だったアーチェリーは、1793 年にいたり、再びアーチェリーをスポーツとして促進するためイギリスに“Society Royal Toxophilite”（王立愛弓者協会）がつけられた。

それは、ジョージ4世（1762 年生れ、在位 1820—1830）は生来陽気な人でまだ、Prince of Wales であった頃から勝負事をこのみ、アーチェリーにも興味をもち 1793 年（31 歳当時）「愛弓者協会」（この協会は 1787 年 6 月 18 日に発足していた）の庇護者となり、その3年後には「ケント弓人会」の庇護者役も引き受けた。そこでこの2つの会は「王立」なる名称をつけ加え、「王立愛弓者会」、「王立ケント弓人会」と称するようになった。このため会員が激増し、新しい射的場をつくったり、クラブ・ハウスを建築したりして、アーチェリーは急速に活気を取りもどし、プリンス・ジョージは彼自身の定めた規則の優勝者には賞品として銀杯を授与するという熱の入れ方であった。

当時、作詩の心得のあったドッド（Dodd）という会員は、次のような詩を作っている。

夏の日、強き手弓もち

樹の間の空き地をローバーし歩く

愉しさよ。

緑の葉なお垂れさがれるとき

緑の森の木蔭にて的に向うは楽しけれ。

（以下ずっと長歌的に続く）

手弓は、足弓や石弓と区別的に用い、「ローバー」は、移動しながら任意に的を決めて射つ一種のフィールドアーチェリー的な射法。

当時はこうした歌謡が多く作られ、曲をつけた冊子が出版されて、

一般に歌われたらしい。

プリンス・ジョージの定めた規則の射程距離は、100, 80, 60 ヤードでこれを「プリンス長さ The Prince's Lengths」と呼び、得点の数え方は「プリンス計算 The Prince's Reckoning」と呼ばれ英国内のみでなく、各国にまで広まって用いられた。

ジョージ4世が1820年に王位についた後、1824年にはヨークシャーに「サースク Thirsk 弓人会」ができ、続いて1825年にはオックスフォード大学に「ニュー・カレッジ弓人会」、1827年にはサセックスに「南サクソン South Saxon 弓人会」というように続々と愛好者の団体が結成されたり、以前にあった協会で活動を再開したのもでてきた。これらには「王立ブリテン弓人会」、ランカスター Lancaster の「ジョン・オゴント John O'Gaunt's 弓人会」等があった。「王立愛弓者協会」や「アーデン Arden 森林弓人会」は創立以来活動を中止することなく継続されていた。

このようにして、ジョージ4世のあと、ウィリアム4世(在位1830—1837)、ビクトリア女王の世代へと、イギリスのアーチェリーはますます盛んになった。すなわち、ウィリアム4世も「王立愛弓者協会」のバトロン役を引き継ぎ、トロフィーを寄贈したりしている。

1844年には、イギリス内にある弓術協会全部の競射大会を開くことが決められ、8月1日「大国民選手権大会 The Grand National Tournament」として、ヨーク州のネーブスマイヤー Knavesmire という競馬場で開催された。ところがこの時はまだ全協会の統一的競技規約が決められていなかったために、実施に当っては、多くの問題が生じ、的の規格、スコアの採点法等にその後の改善すべきための多くの刺激を与えた。当時はジョージ4世の決めたプリンス距離 Prince's Lengths やプリンス計算 Prince's Reckonings が用いられていた。

さらにビクトリア女王(在位1837—1901)は、15歳のとき(即位は18歳)母親のケント公爵夫人と「ケント愛弓者会」に参加し、即位後は、この会を「女王公許聖リオナルド弓人会」と改称させ、1840年

の成婚式の年に、プリンス・コンソート (Prince Consort) は、自分の名を女王と並べて「パトロン」の中に加えさせた。この御兩人は揃って国事の余暇には優雅なアーチェリーという戸外遊戯を楽しんだ。またビクトリヤ女王は、フリントシャー (Flintshire) の「王立英国弓人会」のパトロンともなり毎年 50 ポンドをこの会に与えた。さらに女王は 1844 年には、約 180 年以前にチャールズ 2 世が参加していた「聖セバスティアン友愛会」の会員になり 1893 年には賞金を下賜された。

女王は、「王立愛弓者協会」の「庇護者」にはならなかったが、この会には、プリンス・コンソートがパトロンとなり、その亡き後には、当時まだプリンス・オブ・ウェールズであったアルバート・エドワード (Albert Edward) すなわち後のエドワード 7 世 (在位 1901—1910) が「庇護者」となった。

1849 年には婦人のためのナショナル・ラウンド National Round が創設された。これは、男子の 100 ヤードで 6 ダース、80 ヤードで 4 ダース、60 ヤードで 2 ダースに対し、婦人は 60 ヤードで 4 ダース、50 ヤードから 2 ダースという射ち方であった。婦人の第一回トーナメントはダービー Derby の町で開かれた。

イギリスにおける弓術の最盛期は 1830 年頃からはじまり 1860 年頃をその頂点とみることができよう。1848 年から 1867 年頃までの 20 年間常に各大会の優位を占めていたフォード Horace Alford Ford のような偉大な弓人は二度と世には出ないと思われるような達人であった。1860 年にバス町 Bath で開かれた大国民大会には、婦人が 99 人、男子は 109 人もの大参集であった。

大国民弓術協会 The Grand National Archery Association が協会として明確に組織設立されたのは 1861 年であった。

「アーデン森林弓人会」は、イギリスのアーチェリー界では有名な協会の一つで、1785 年頃愛弓熱が全英に広がった頃に起原をもち、初代会長にはエイルズフォード伯爵 (Earl of Aylesford 第 4 世) を戴き、以後その子孫が熱心に会長役を引き受けている。この協会の特

徴は、森林弓人会の名にふさわしく、射撃距離が長く、常に 100 ヤードを守っていること、的が低い（下端が地面から 18 インチ）こと、矢数によらず時間を基準にする古代射弓法を保存していることである。会員の定員を 80 名とし、その人選は社会的に最高水準にある人に限るといふ誇りと伝統を維持している。

スコットランドの「王立弓人協会」は最も伝統のある名門弓人会である。この会の起原は古く 1676 年にはじまり、これにはスコットランドの貴族たちが社交的な形で大勢加入してきて、入会についてはひじょうに厳格な資格審査があった。この協会は 1703 年にアン女王 Queen Anne（在位 1702—14）から法人の認可を与えられており、射法は歴史が古いので、前述のアーデン森林弓人会に似ている所が多かった。この「王立弓人協会」の本部は、エジンバラ Edinburgh にある弓人会館 Archer's Hall で、そのホールには弓に関する古い興味深い記念品が多く陳列されている。

19 世紀の頭初において、イギリスで盛んなスポーツ、なかでも上流社会で流行したものは、テニス、ゴルフ、自動車などがあった。この中に入ってアーチェリーもレジャー・クラスの娯楽として相当な勢力をもっていた。したがって、その当時登録されていた活動中の弓人協会は 68 もあり、その間での対抗試合も頻繁に催され、大がかりな公開競射大会や大国民競射選手権大会 The Grand National Archery Championship が毎年 1 回ずつ開かれた。

また、第 1 次世界大戦前に、英仏間の最初の国際試合がフランスのル・トゥーケー（Le Touquet-Paris-Plage）で催された。

1908 年の第 4 回オリンピック、ロンドン大会には英仏米の 3 ヶ国のみの出場でフランスから 15 人の選手が参加し、イギリスからも 15 人、アメリカ選手はただ 1 人であった。このロンドン大会は 7 月 13 日から 25 日まで行なわれたが、終了後 2 日たって、大国民競射大会が催され、これには国際的に仏、米選手も参加し、男子 53 人、婦人 95 名が出場した。また 7 月 29 日には、「古式スコートン矢協会」の第 235 回競射大会が行なわれ、これにはただ一人で参加した米国の

リチャードソン A. B. Richardson が優勝した。

第1次世界大戦中(1914, 7—1918, 11)は、弓界も休業状態であった。大戦後は、女子も「王立弓人協会」に正会員として入会できるようになった。世の進歩と共に人間平等、男女の差別撤廃、スポーツの民主化という近代的傾向はこの第1次大戦以後もこのような形で保主的伝統を重んじたイギリスにも現れていた。大衆化のために寛大な、そしてまた賢明な処置であったといえよう。

1932年には、アーチェリーの世界的な普及の関係から、イギリスにおいても、国際的代表機関の必要に迫られ、大英帝国の弓人総体を代表する団体として、国際弓術総評議会(GCIA)なる機関を結成し、初代会長にリーベルストーク卿を推し、当時英国国内で有力であった8団体(王立弓人協会、アーデン森林弓人会、王立愛弓者協会、大国民弓術協会、大西部弓術協会、南部諸州弓術協会、中北部弓術協会、弓術新報編集者)から各1名の委員、副会長6名(男女各3)、庇護者1名等を出して創立された。

そして、この頃から英米弓人会の交流は特に目覚しくなった。

VI. アメリカのアーチェリー

アメリカ合衆国のアーチェリーを述べるにあたっては、まず、その原住民であるアメリカインディアンの弓について触れておく必要がある。

もちろん他の土人と同じように、アメリカインディアン達も食料を得るため、あるいは敵と戦うときの主要武器として弓を使っていたことは確かである。それは、高原や海岸に住んで、肉や魚を主食にしていたインディアンにしても、西南部にいたプエブロ・インディアン(Pueblo Indians. Colorado州中部の種族)の中の1部のように、ほとんど農産物だけで生きていた種族にしても、みな程度の差こそあれ、弓に頼っていたのであった。

そしてこの頃の、アメリカインディアンの弓の技術は非常に優れていたように言い伝えられたりしているが、それは物語として誇大化さ

れている傾向が強い(多くのなかにはたいへん上手な土人もいたことは、日本的那須与一の如くであろう)。弓や矢にしても当時の材料、技術からみてもそれほど精巧なものとは考えられない。命中率がよかったということは一つには野生の動物や魚が多かったことと、彼等は間違いなく命中する至近距離まで接近する技術と勇気とをもっていただからであった(たとえば動物の毛皮を頭からかぶって動物の通り道を知っていて、気長がに待ち伏せしているとか、水を飲みに来る場所を知っていたとか)。このことについては、Collier's Encyclopedia (1960 版, Vol II 75 頁)の「Archery」の項に、

In the Western Hemisphere, the American Indians were able hunters with bows and arrows. However, their effectiveness was not due to their skill as archers, or to the excellence of their weapons, which were often crude, but to their unusual ability to stalk within close range of an enemy or game. They contributed greatly to the development of field archery.

「西半球では、アメリカインディアンは弓と矢をあつかう有能な猟師であった。しかし、彼等の有能さは、射手としての腕や武器(それらはしばしば粗雑であった)の優越さに負っているのではなくて、敵や獲物の近い射程距離内にしびよる非凡な能力によるものであった。彼等はフィールド・アーチェリーの発展に大きく貢献した。」と述べられている。

しかし、これらのインディアンが使っていた弓が、現在のアーチェリーに発展したのではなくて、現在のアーチェリーは、イギリスでの弓術すなわち、競技を型どった弓術が、アメリカで行なわれるようになったもので、19世紀のはじめ、フィラデルフィアやニューヨークの公園とか富裕家庭の庭園で行なわれるようになり¹¹⁾、1828年6月3日に「フィラデルフィア連合弓人会」(The Philadelphia United Bowman)という組織がアメリカで最初につくられた。この会員は発足の当時は、医学博士の Robert E. Griffith とその友人で薬剤師の、Samuel P. Griffith, Titian Ramesy Peale とその弟の Franklin Peale

の4人であった。その後2年たってこの弓人会は「弓人要覧」(副題、フィラデルフィア連合弓人会で実施している長弓の射弓法)という本を出版し、その中に「弦は絹でつくり、矢を白柁材でつくり、羽根は鷺、白鳥、青鷺などの羽を使った」というようなことが書いてある¹²⁾。

この会には、会員数を25名にとどめるという制限があり(実際には25名に達したことはなかった)、創立から1888年までの間の会員総数は57名であった。

南北戦争(1861—1865)の頃、しばらく影をひそめていた弓は、1870年代に社交スポーツとして復活された。このことについては、モーリス・トンプソン(Maurice Thompson)とウィル・トンプソン(Will Thompson)の2人の弓に対する熱情を忘れることはできない。特にモーリス・トンプソンは後にシアトルの有名な弁護士になった人だが、1877年と78年の間に「Harper's Magazine」という雑誌に自分の経験を執筆し後にそれをまとめて「弓術の魅力」(The Witchery of Archery)と題する単行本にした。次ぎにこの本の中の一節を引用しておこう。

「私がこうして横になっていた時のことである。トミー Tommy (インディアンの男)が、希望しても見られない弓術の演技を、——誰も見たことがないと思われる演技をおこなった。われわれの頭上、やわらかい日光が静かに漂う空中高く、まるで純白のような鶺(みさご、海岸の岩にすむ鶺に似た鳥で魚をとるのが上手で、魚鷹とも呼ばれる)が風に乗って飛んできた。トミーは櫓をあげてカヌーに横たえ、弓と矢を取り上げて素早く弦を張った。そして一瞬気を落付け、それから鋭い眼を鳥に集中し、ひじょうな力をこめて弓を引いた。彼の腕の大きな筋肉がよじれて瘤ができ、頑丈な弓の木が折れそうであった。

そこで彼が矢を放つと、矢は空中で相当な唸りを生じた。その矢の飛ぶのは眼に入らなかったが、突如としてその大きな鳥の上方に白い羽根の輪が見え、「ぎゃっ」という鳴き声が聞こえたと思うと、鳥は矢で串ざしになったまま水面に落ちてきた。

トミーの弓は、小さい若木の幹を二つに割ったもので、ほとんど仕

上げをしていない。ところが矢は驚くべき精密な仕上げで、本当の科学的な原理に基づいて羽根付けをしてある。私はその矢を曲げようとしたが、全然曲がらない。またトミーが弦を張って仕掛けたあと、その矢を矢尻まで引こうとすると私の指の付け根がはずれそうになる。ところがトミーは節くれだった手でそれを苦もなく使うのである。私は彼の作った矢を私の弓で一ぱい引いて射てみたが、これは一番上等のハイフィールド (Highfield) 製の射用の矢と同じに射てた。私のヒッコリー材の狩猟用の矢は私が直接監督して腕ききの大工に作らせ、その上、技術で定評のある鍛冶屋に矢先を磨かせたもので、ひじょうに費用がかかっている。ところがこれが、彼の作ったものよりも適しないのである。野外で長距離を射て矢の飛び方を観察すると、誰でもすぐそれが判るのである。この点では、土人の知恵と技術が、文明開化の学問や技術に対して勝利を得ているのである。しかしスー族 (Sioux), ナボホー族 (Navajos), コマンチ族 (Comanches) などの持つ矢筒の中にある矢は、話にならないほど粗雑で役に立たないものである。」と述べてある。

1878 年から 79 年には弓術クラブが、アメリカに百ぐらいできたらしい。そこでこれらの各クラブの活動を連係する協会が必要になり、シカゴ市のカーバー (Henry C. Carver) の尽力により、モーリス・トンプソンを会長として「合衆国国民弓術協会」(The National Archery Association of the United States) が設立され、1879 年 8 月に、その第 1 回競技大会が、シカゴのホワイト・ストッキング公園 (White Stocking Park) で盛大に開かれ、競技者は 89 名 (男子 69, 女子 20) もあり、この参加人員は 1926 年に至るまで例を見なかったほどであった。協会の本部はボストンに置かれた。

1879 年協会創設から 5 年間は弓技の最盛期であり、特に女性によって愛好されたが、その後長い間 (約 50 年間) 弓術は停頓した。

この弓術衰退の理由としては、

1. 弓技に内在するむずかしさ (技能は奥行きが深く、根気のない者に失望を与える)。

2. 用具の入手，修理保管の経済的困難.
3. 1890年代におけるテニスの興隆.
4. 自転車の人気上昇.
5. 他の屋外競技（フットボール，野球，ボート，ゴルフ）の急速な勃興.

というようなものがあつた。結局は各種スポーツの台頭によって各人それぞれ好みの種目に向かい，スポーツ全般の振興という風潮が現れてきたのであつた。

N. A. A.（全米洋弓協会）で，ウォンド競射（Wand Shoot¹³⁾）が行なわれ初めたのは1913年からであり，クラウト競射¹⁴⁾（Clout Shoot）は，ジャージー市において，野鴨の影絵を競射したのに起源して1922年から始まったものである。

1929年に全米洋弓協会（N. A. A.）が調べた弓術クラブ数は，大学，学校，夏季キャンプ，ボーイ・スカウトなどのクラブ数を除いて147クラブであり，米国の弓人総数は，約15万人であつた。

VII. 日本におけるアーチェリー

(1) 在米邦人の貢献

アーチェリーが日本に入ってくるまでには，その前における数年間の在米日本人のかくれた貢献があつたことを見逃がすことができない。

それは，新潟県長岡市出身の桑山仙蔵という人がいて幼少の頃から和弓をやっていたがアメリカに渡ってからも，その趣味を続けていた。そして昭和6年10月29日に，ニューヨーク・ロングアイランド・ウッドサイドにあつた自邸の裏に日本弓の道場を設けた。そこで日本弓に興味をもつていた在米日本人の何人かがこの道場に通うようになった。その中には，横浜正金銀行ニューヨーク支店勤務の後藤実敏（日置流の大家で，その道場での指導的立場にあつた。昭和46年3月まで亜細亜大学教授，外国為替，国際金融，英語担当，明治24年10月生れ），建築造園家の片川秀治，中川義夫，片桐商会の松尾弘，和田義懐，石見

重三郎、紫垣元喜、多田恒助夫妻、杉村百合子、読売新聞社員の菅重義等の面々がいた。それらの人々が弓道会を創立し、会則もつくり、初代会長に後藤実敏氏を推した。

昭和7年11月29日には弓道会創立1周年を記念して、日米両弓会の会員と家族の懇親会を、日本倶楽部で開催した。このようにして日米弓人の交流が行なわれるようになった。後藤氏が任を終えて帰国した(在米昭和3年11月—10年5月まで)後は、同じ正金銀行勤務で和弓の練達者であった細見信平、伊藤裕義の両人が指導の任を引き継いだ。

こうした間に、アメリカ人の中にも日本弓に興味をもつものがあらわれ、米人弓道家との交歓が一層深まる気運ができ、遂にニューヨーク、ロングアイランド、ジャクソン・ハイツの米人アーチェリー協会で競射会を開催することになった。この時の参加者は全員で約50人であった。

和弓、洋弓にはそれぞれの長所があり、日本弓をやっていた者の中にも洋弓に興味、魅力を感じる者が現われてきたことは否めなかった。それは、日本弓はどちらかといえば、精神修養の手段として、礼儀、形式を重んずるのに対し、洋弓には科学的な構造や技術があり、スポーツとしても楽しめるし、和弓と違った特質があったからであろう。洋弓を日本へ紹介した第1人者の菅重義¹⁵⁾は「日本弓に禅の要素があるとすれば、洋弓には詩想豊かなものがあるといえる」とも述べている。

この菅重義は和弓をアメリカ人に披露しているうちに、自分も洋弓をはじめようになり、ついにジャクソン・ハイツのアーチェリー協会の会員にもなってしまった。

和弓の射程が28mであるのに対して、洋弓は遠的であり(30mから最高90m)前述の桑山邸の和弓道場は狭くなり、ウッド・サイドの廃墟になった飛行場の跡を借りて練習するという状態で、米人との試合には、いつもジャクソン・ハイツの射場を使用したものであった。

その当時、ニューヨーク州はもとより、ニュージャージー、マサチ

ューセッツ、コネチカット、さらに遠くはペンシルバニア、ミネソタの各州の洋弓協会、クラブからも競射の申込や招待を受けるようになり、出場する度に弓友が増し、日米間の交歓はだんだん盛んになった。

桑山、岡島等は米人との試合に、日本弓を使って、洋弓と同じ 48 吋 (122 cm) の遠的をアメリカン・ラウンド¹⁶⁾で競射したりした。またあるときは、鎧、かぶとの武者姿や、羽織袴の日本式いでたちに威儀を正して、矢渡し¹⁷⁾の式を行なって、日本弓道を米人にまたは日本人二世たちに紹介した。この頃早川雪州なども日本弓を携えて参加したり、紫垣元喜はその後もニューヨークに日本弓の道場を構え、長く米人に日本弓道を指導した。

昭和 11 年 5 月 15 日に、マウント・ホリヨーク女子大学で行なわれた春季大運動会には、多田いさを夫人と共に岡島辰五郎の二令嬢が和弓のデモンストレーションを行ない、その時の情景を、マサチューセッツ州スプリング・フィールドのユニオン新聞は次の如く報道した¹⁸⁾。

「二人の日本女性（岡島氏愛女二世姉妹）が、あららぎ（いちい）の弓と、竹の矢を掲げて、ホリヨーク女子大南構内の弓場に現われた。その悠々とした態度、一挙手一投足の均斉と、つつしみは、ひと構えごとに数秒の間を感ぜしめる。そしておもむろに、左手の弓を持ち上げ、矢をつがえ、そして放った。この姉妹二人は、不断に沈黙を守り、姿勢をととのえ、いつも同時の気合で一斉に矢を放った。二人の装束はさっぱりとした黒の上衣に、黒ずんだエビ茶の袴、白襪に白鉢巻姿で、会場の人々に多大の興趣を感ぜしめた。この二嬢はいずれもニューヨーク生まれで、本日催された日本の大弓術はニューヨーク日本人弓道クラブの道場で習得したのである」と。洋弓が比較的自由で、格式ばらない射法で、服装も各人思いのままといった気安さに比べ、和弓には服装の統一制、立ち居振舞の間のとり方、矢の持ち方、射の様式等、茶道、華道とも相似た東洋哲学的要素まで組立てられている点が多く、この日のデモンストレーションは、米人の眼に、さぞかし奇妙な儀式とでも映じたことであろう。

昭和 11 年 10 月 17 日には、第 1 回日米親善競射大会が開かれるはこびになり、ウッドサイド野外弓場においてなごやかに行なわれた。その年は、第 11 回オリンピック・ベルリン大会が開かれた年で、嘉納治五郎は、第 12 回オリンピック大会を東京に招致するために、ベルリンでの I. O. C. 総会（7 月 31 日）に出席、ベルリン大会視察（8 月 1 日—16 日）、ルーマニアでの国際教育会議（9 月 15 日）、ポーランドでの国際商社会議（9 月 17 日）に参加等の任を果たしての帰路¹⁹⁾ 10 月 6 日から 29 日までアメリカに滞在中であったので幸にも、この競射大会の主賓として招待されることとなり、他に N. A. A. (National Archery Association 全米洋弓協会) 会長のクロプステッグ (P. E. Kropusteg) 博士、井上豊治総領事代理夫妻、日本弓道会名誉会長高見彦彦らを招き、嘉納主賓は「スポーツを通じて、日米人が親しく接触することは実に喜ばしい。日米人相互の最もよき了解と親交を図るものである……」と挨拶の後、ロングアイランド洋弓会長のヒックマン (Clarence Hickman) 博士の挨拶があって、はなばなしく競射が開催され、日本側は和弓と洋弓をアメリカン・ラウンドで行なった。この日米競射大会がきっかけとなって、次の年の昭和 12 年から日米親善通信競射大会なるものが開かれることとなった。すなわち、この日の、競射大会終了後、来賓を招いて参加者全員の晩餐会を日本倶楽部で催し、その際、それ以後の計画について隔意のない懇談を交し、クロプステッグ (Paul Ernest Klopsteg) 全米洋弓協会会長は「近々日米通信競射を実施し、これを年中行事とし、尚 1940 年のオリンピック東京大会の開催に当り、米国弓団を日本に派遣して両国斯道向上発展に資し、進んで国交親善の一助としたい」と述べた。一同はこの言葉に賛意を表し、日本国内の斡旋は、帰国を目前にしていた伊藤祐義に正式に依頼することになった。

主賓嘉納治五郎とクロプステッグ会長を中心としてその後の折衝が続けられ、帰国した伊藤祐義から、日本求心会会長の千葉胤次との話し合いも順調に進んだ旨の報告もあり、いよいよ第 1 回日米通信競射大会を、昭和 12 年 10 月中に開催することを決定した。

前述の如く、昭和 10 年 5 月に、ニューヨークの日本弓道会会長後藤実敏が帰国した後、細見信平、伊藤祐義が指導に当たっていたが、この兩人も帰国したため、ニューヨークにおける長老の水谷渉三（紐育新報社長）を会長に推し、日本弓に残ったのは、岡島辰五郎、桑山仙蔵、片川秀治らの年長者達で、菅重義をはじめとする若年組は洋弓に専心するようになった。菅は、その著「洋弓」のあとがきの所で²⁰⁾、「私が洋弓に志したのは、昭和 12 年の在米当時からである」と述べている。この頃から米人と弓を通じての親交がさらに深まったわけである。

昭和 12 年 3 月 6 日、ニューヨーク日本弓道会は、臨時総会を開き、会則修正を協議した。水谷渉三会長を議長として、水谷、岡島辰五郎、菅重義の三人によって起草された修正案を議決した。またこの席で紫垣元喜が全米洋弓協会（N. A. A.）に加盟することを満場一致で可決したので、ニューヨーク日本弓道会は、国際的に進出するきっかけをつくったことになる。そして洋弓同好会を結成したのである。

昭和 12 年 5 月 23 日には、ジョンズ・ビーチで行なわれたロングアイランド米人競射大会に、この洋弓同好会員が参加し、6 月 6 日に、メトロポリタン米人競射大会が、ロングアイランドのロックビル・センターで開催された時も、同地の洋弓クラブから招待されて参加した。

洋弓の練習をするためには、従来のジャクソン・ハイツ弓場では狭くなったので、日本弓道会、洋弓同好会は、広い弓場の必要に迫られ、ウッドサイドの廃墟になった飛行場跡を好適の場所と考え、その斡旋を、ジャクソン・ハイツ洋弓協会長のヒックマン博士、同会員のスミス・マイヤーに依頼し、当局の快諾を得て昭和 12 年 6 月から、そこを野外弓場として使用できるようになったことは前にも述べた通りである。そして 6 月の競射会はこのホルムス飛行場新設野外弓場において 27 日の日曜に開催した。

7 月 3 日、ニューヨークのラ・トーアレッド・ゴルフクラブで開かれた瑞典米国際競射会には日本人洋弓同好会員も招待を受けて参加した。その後毎月開催された各地における競射会に紐育洋弓同好会の

日本人はいつも招待を受けていた。その頃ニューヨークのクインズにあるアリボン・パークでの競射会には、よく手入れされた芝生の射場で一度に 300 名もの選手がラインアップできるほどの広さでクラウト競技¹⁴⁾ (Clout shooting) も充分にでき、ここでは毎年、ニューヨーク州の各弓会の競射会が行なわれていた。

日米親善通信競射大会を開催することは、昭和 11 年 10 月 17 日にウッドサイド野外弓場で第 1 回日米親善競射大会を開いた夜の晩餐会の時、クロプステッグ N. A. A. 会長の発言に端を発し、その後各関係の賛成を得て、昭和 12 年 10 月中に実施することを決定していた。

(2) 日米親善通信競射大会

第 1 回日米親善通信競射大会は、ちょうど 1 年前に実施することが決定されていたので、まず米国側は、昭和 12 年 10 月 17 日午後 2 時から、ウッドサイド・エアポート野外弓場で 30 人の選手が次のような規定によって開始した。

米国側規定 48 インチ標的、射程距離 40 ヤード、5 ラウンド、30 射、点数 1 点より 9 点。

日本側規定 標的直径 $14\frac{1}{4}$ インチ、射距離 31 ヤード、各矢の中 1 点、3 人 1 的 5 立であった。

米国側の競射日には、立合いとして、日本弓道会員、洋弓同好会員、若杉総領事の出席を煩わし、米国側からは N. A. A. 会長クロプステッグ、ヒックマン博士、エルマア博士、G. A. Smith, E. Myers, L. G. Chapin 等 200 余名が観戦した。競射は午後 4 時半に終了し、その結果は同盟通信ニューヨーク支局長の萩原忠三によって直ちに日本に報ぜられた。

日本側の競射はそれより 1 週間遅れた 10 月 24 日午前 8 時から、目黒のアメリカン・スクール校庭にて行なわれた。予選によって選ばれた 30 人 (補欠 5 名) の選手には 1 週間前に行なわれた米側の記録はすでに知らされていた。日本流による開会式の後 10 時 30 分競射が開始された。この通信競射大会の試合規定は前述の如く同一条件で

ないため一概に勝敗を定めることは困難であったが、結果は次表の如くであった。

第一回日米親善通信競射大会成績

	順位	氏 名	得 点	総合得点	平 均	的 中 率
アメリカ	1	ヒル (Harold Hill)	224	4914	163.8	27.8
	2	ウィーズ	212			
	3	ボット	201			
	4	チーチェスター	200			
	5	スクェアース	198			
日本	1	重野幸吉(2段)	232	5851	195.3	29.8
	2	越村外治(3段)	230			
	3	丸山広次	220			
	4	村山茂雄	216			
	5	浦上 栄	214			

6位以下略

この日米親善通信競射大会は、その後昭和 15 年の第 4 回大会まで続き、毎回試合規則に多少の改正が行なわれ、試合条件の相違から成績の優劣は別として、両国弓人の友好親善に貢献したことに大なる意味があった。それ以後は、戦争のため中止となってしまったことはいうまでもない。

・日米女子親善通信競射大会

男子の通信競射大会が、昭和 12 年から行なわれたのに対して、女子も同様な大会によって日米間の親睦を深めようという企画が生じ、第 1 回日米女子親善通信競射大会という名称のもとに、日米両国のハイスクールの女生徒間で競射大会を開くことになった。米国側は洋弓で、メリーランド州のヘーガスタウン・ハイスクール (Hagerstown High School) の生徒 30 人、日本側は日本弓で愛知県立第一高女の鈴木歌子主将 (初段) 以下 20 名がそれぞれ昭和 13 年 10 月 2 日に実施した。米国側は 48 インチ標的で射程距離 50 ヤード、30 射、日本側は 15 間、尺 2 寸の標的、20 射で、各条件は異なっていたが、この大会では日本側が勝ち、翌 14 年 1 月 14 日に 19 年ぶりに帰国した菅重義がヘーガスタウン・ハイスクールから託されて持ち帰った

賞品を伝達した（これについての詳細新聞記事は 31 頁を参照されたい）。

第 2 回日米女子親善競射大会は、昭和 14 年 10 月 30 日、米側がニュージャージー州のブルームフィールド・ハイスクールの選手 10 名と、日本側は 11 月 19 日に、東京上野高女弓道選手 10 名との間において行なわれた。結果は、総得点 1106 点对 654 点で米側の勝利となった。日本側の得点が少なかったのは、たいへん不利な条件があったためで、当日の上野高女選手の善戦は賞賛に値するものがあったという。その不利な条件とは、はじめ双方の取り決めでは、射程距離が 40 ヤードであったが、アメリカ側が急に 50 ヤードの距離に変更を求めてきたこと、洋弓では距離変更がよく行なわれて成績に悪影響を与えることは少いが、和弓での距離変更は重要事項で、それに応じての練習が思うようにできなかった。さらに日本側の競射当日は朝来の冷雨、午後も曇りの不良天候で選手が寒気に萎縮してしまったという条件であった。この日は、グルー米大使夫人と、グリーン秘書官の出席があり、日本側からは、長い間アメリカにいて、彼の地で弓道会初代会長をつとめて帰朝した後藤実敏が来賓代表として挨拶し、競射終了後は、菅重義の洋弓実技の披露があった。この日の模様を、東京日日新聞（現毎日新聞）は、次の如く報道している。

「紅毛女与一に凱歌 日米対抗の腕比べ」という見出しで「弓道を通じて日米女学生の親善をはかろうというので、昨年から開催された日米対抗女子中学弓道試合の第 2 回競射会は 19 日午前 9 時から、芝公園弓道場で行なわれた。この競射は両国間にあらかじめ代表出場校を定め、在留大使その他の立会いの下に、選手 10 名がそれぞれ 30 射を行ない、その得点の結果を互いに通報して、勝敗を決定することになっている。本年度の代表校は米国側はニュージャージー州ブルーフィールド・ハイスクール、日本側は上野高女で射式は米国式（的の直径 4 尺、射程距離 50 ヤード）で行われた。この日道場には、グルー米国大使夫人、グリーン書記官が出席、白鉢巻姿も勇ましく奮闘する選手たちの競射を熱心に見学した。試合の結果は、米国側総得点 1106 点、個人最高得点 30 射——29 中、167 点、日本側、総得点 654 点、

個人 27 中, 131 点で, 今回は団体, 個人とも米国側が優勝した。」

(3) 菅 重義, 小沼英治等の尽力「日本洋弓会」の誕生

日本にアーチェリーを導入した元祖は, 菅重義で, 氏は明治 22 年香川県に生れ, 大正 9 年, 31 歳の時読売新聞特派記者としてアメリカに渡り, はじめは在米邦人とともに日本弓をやっており, 昭和 6 年ニューヨークに創立した弓道会(初代会長後藤実敏)の会員であった。弓を通じて米人との親交が深くなり, 昭和 12 年から洋弓に興味をもち, ジャクソン・ハイツのアーチェリー協会の会員となった。そして昭和 12 年から行なわれた「日米親善通信競射大会」の創設や運営に大いに尽力し, 昭和 14 年 1 月 14 日に 19 年振り, 洋弓具を携えて横浜港に帰ってきた。その翌翌日の 1 月 16 日に友人(朝日新聞社員)に連れられて, 早稲田大学武道館で開催されていた「東西学生対抗弓道大会²¹⁾」(日本学生弓道連盟と東京朝日新聞社共催)に出席した。会場には学生の大会とはいえ, 小山松吉(元法務大臣), 小山高茂(松吉子息, 現実業団弓道連盟副会長), 千葉胤次(前全日本弓道連盟会長), 宇野要三郎(現全日弓連会長), 浦上栄(範士, 十段)以下日本弓道会の長老が多数来賓として列席観戦していた。試合終了後, 菅は関係者多数の懇望により, 洋弓の演技を披露した。これが日本におけるアーチェリーの第一矢であった。当時菅は満 50 歳で, 45 ポンドの洋弓を軽く引いて見事に的射し, 並み居る諸氏を感嘆させ, 翌日の朝日新聞は, すこぶる興味を惹いたと報道した。

菅氏は 1 月 14 日横浜に入港した時, アメリカ選手のサイン入り矢と, メダルをアメリカ側から依頼されて携えていた。サイン入りの矢は, 第 1 回日米親善通信競射大会(昭和 12 年 10 月実施)で勝った日本側の弓心会(当時の会長は千葉胤次)への贈物であり, メダルは, 第 1 回日米親善女子競射大会(昭和 13 年 10 月実施)の勝者であった愛知県立第一高等女学校の選手達に, アメリカのヘーガスタウン・ハイスクールから贈られたものであった。そしてこのメダルの伝達式は, 昭和 14 年 2 月 2 日菅氏が直接愛知県立第一高女へ出かけて行なった

もので、翌3日の名古屋新聞には次の如き記事が掲載された。

「第1回日米女子弓道親善大会は、昨秋10月2日愛知県立第一高女と、アメリカ・メリーランド州ヘーガスタウン高女との間に行われ、圧倒的成績をもって愛知県第一高女の優勝に帰したが、2日ヘーガスタウン高女から賞品(メダル)と、ニューヨークの岡島辰五郎氏の撮影になる、アメリカ側競技大会の16ミリ映画が、20年ぶりに帰国した在ニューヨーク日本弓道会の菅重義氏(50)によって愛知県第一高女にもたらされて喜びの二重奏を奏でた。菅氏は去る14日横浜入港の秩父丸で19年ぶりに帰朝、ニューヨークの日本弓道会会員として、さきに帰国した岡島辰五郎氏らと共に活躍した人で、今度の帰朝を機にヘーガスタウン高女から愛知県第一高女へ賞品授与を託されたものである。

この日午後2時から、全校生徒1200人は講堂に集まり、長谷川校長から選手代表鈴木歌子さんらに賞品を授与、菅氏から日米女子弓道の勝利に対する邦人の感謝と熱狂を伝えて、アメリカ弓道界の状況を述べ、終って校庭で菅氏からアメリカ式的によりエキジビションが行われた。菅氏はグリーンのスーターに腰に矢筒(クイバー)をさげ、あちらの弓をもって現われ、まず足を9インチに開いて、五色的的に向い空へぐっと矢を向けて的に放てば、鮮かに的を射て生徒の拍手を浴びた。弓は日本のものよりもやや短く、アーム・ガード(腕当)を左手にはめ、右手にはスカルチン・クラブを使用し、矢は左側にあてて引くのであるが、やさしそうに見えて案外むずかしく、渡辺同校部長が2,3本引いて見たが、矢は的を遊離して爆笑だ。」と。日本の女学生が、アーチェリーの実演を見たのはこれが初めてであった。

日本におけるアーチェリーの始まりは、前述の如く、昭和14年1月16日に菅重義が早稲田大学武道館にて、その第一矢を放って、並み居る日本弓道界の元老や学生弓人に模範演技を披露したときからであり、同氏が帰国談やアーチェリーの紹介を朝日新聞に載せたり、弓道大会終了後にエキジビション・ゲームとして紹介したり、昭和12年から(女子は13年から)日米親善通信競技大会(日本側は日本弓で行

なったのであるが)を開催し、さらに一方では、小沼英治²²⁾(氏は日置流雪荷派第 15 代目、日本弓道七段で、京都の三十三間堂には優勝額が掲げられている)は、アーチェリーにも興味をひかれ、昭和 12 年頃から研究をはじめ、貿易斡旋所に依頼して、アメリカのベン・ピアソン会社から洋弓に関する用具類と参考書を取りよせ、氏独自の立場で弓具と射術の研究に熱意を示していた。そして日本の竹が弓の材料として非常にすぐれていたもので、これを使ってその当時としては、もっとも矢飛びのよい洋弓を製作して、アメリカに輸出する計画をたて、興業銀行の理事をしていた泉至剛の協力によって着々と計画を進めていたが、不幸にも日米の状況が悪化し、第二次大戦となり、その計画は中止せざるを得なかった。

一方、菅重義は、昭和 16 年に入り、同好の士を集めて、ロビンフッド・クラブという洋弓の会合を東京に創設して、アーチェリーの普及と発展に尽力しはじめたが、これも間もなく勃発した戦争のために中止のやむなきに至った。

終戦後、日本弓道は武道であるとの理由で追放され、学校教育から除かれ、その統括団体であった大日本武徳会は解散させられた。そこで菅は「日本弓道におけるスポーツ精神」ということを強調し、パージを解除してもらおうべく、連合国総司令部(G. H. Q.)の情報部に説明のため熱心に足を運んだ。

その甲斐あってか、2年後には日本弓道のパージは解かれ、各大学では日本弓と洋弓が各独立してクラブ活動を開始するようになった。

昭和 20 年 8 月、終戦直後疎開先から東京にもどった小沼英治は、自宅に洋弓研究所の看板を掲げて研究を続け、21 年 9 月には、現在の西巢鴨に株式会社アサヒ弓具を創立して弓具の製造にとりかかった。そしてその年 10 月には、アメリカ人のオーガスト、テラー、ヘレン婦人、ラスキー婦人などの同好者が集まり、「日本アーチェリー・アソシエーション」をつくり、主にアメリカ人の同好者で練習をはじめた。

昭和 22 年になり、当時雑誌「弓道」を発行していた小穴増人は菅

氏の宅を訪ね、洋弓会の設立をすすめた。菅氏もかねがねその希望をもっていたので、50年来の親友であった下条康麿（元賞敷局総裁・文相）に洋弓会設立の協力を得、さらに、山崎匡輔（元文部次官）、中村嘉寿、東隆兩代議士、高良とみ、厨川文夫（慶大教授）、萩原忠三（共同通信編集総務）、白橋竜夫（開明社社長）、岡島辰五郎、後藤実敏、目賀田重芳等 20名の賛同協力を得て、昭和22年3月「日本洋弓会」（Japan-Archery Association）を創立し、洋弓の普及に尽力することとなった。

ちょうどその頃、菅は安藤信昭（旧福島藩主、元宮内官）と知り合い、杉並区高円寺の同氏邸を解放してもらい、日本洋弓会本部をここにおいた。練習場に当てられた処は幅約20m、縦90m位あったので、アメリカン・ラウンドの競射もできて、大へん都合のよい練習場であった。その頃はまだ終戦処理も終わっていなかったので、進駐軍の中にも多くのアーチャーがいたため、多数の将校がここに入出入りして練習するようになり、桃の節句、端午の節句または、クリスマスなどには、安藤家の歓待もあって、将校たちは自分の家族も同伴して、日本アーチャーと和やかな集りを催し、日米親善のためにも大いに役立った。

昭和22年11月8日の日刊スポーツ新聞に、4回にわたって菅重義は「アメリカの弓を語る」という記事を掲載した。前述のように弓具と射術の研究に熱意を示し、洋弓研究所という看板を掲げて、株式会社アサヒ弓具工業を設立していた小沼英治は、この記事を見て早速菅を訪れ、いろいろと教えを受け、もともと日本弓の達人であった小沼は洋弓についても急速の進歩をとげ、二人は大いに語り合った結果、菅が22年3月から創めた「日本洋弓会」と小沼が21年10月おもにアメリカの同好者を集めてはじめていた「日本アーチェリー・アソシエーション」とが合流して「日本洋弓会」という名称のもとに菅を会長に推して統一的な機関が昭和22年の末に誕生した。

明けて翌23年春には、この「日本洋弓会」最初の催しとして、東京都豊島区の総合運動場で、駐留軍のアーチャーを招いて、終戦後初めての日米対抗試合を開催した。

その後は、この対抗試合がきっかけとなって、都内や米軍基地内で練習会や対抗試合がしばしば行なわれるようになった。戦前は日本兵士が銃をかついで走りまわったり、新年には観兵式が行なわれていた代々木練習場は、ワシントン・ハイツと名も改められて駐留軍の住宅となってしまったが、その明治神宮境内横のワシントン・ハイツや、成増のグランド・ハイツ、朝霞のキャンプ・ドレーク、立川、横田の基地、遠くは横須賀海兵団跡地の米海軍基地などが試合会場として利用された。ことに朝霞では、フィールド・アーチェリーが盛んに行なわれた。これらの試合に骨身を惜しまず協力した人達は小沼副会長のほかに飯田有正副会長、大塚栄治、小川弥一、寺井達男各理事等がいて普及、発展に尽力した。また米人側軍人には、ハービソン少将 (Joseph S. Harbison)、テラー大佐 (Rorenzo Taylor)、シュミット中佐 (M. T. Schmidt)、グラム少佐 (Gram)、テラー大尉等がいて、特にハービソン少将は、浦上師範について、日本弓道も稽古した。

この頃、洋弓場の施設がないため、練習にも試合にもたいへん不都合であり、管会長は都営の洋弓場設置の申請書を 23 年 3 月に提出したが、都内には適当な敷地が容易に見当らず (日本弓は射程 28 m に対して、洋弓は最高射程距離は 90 m を要する)、この申請はかなえられなかった。しかも前述の安藤家の厚意によって使用させて貰っていた邸内練習場も移転のため不可能となり、副会長の原口一郎 (日本製紙重役)、飯田有正の邸内を使用させて貰って練習や競射大会場に当てることのできた。当時最も多く利用できたのは、ワシントン・ハイツ (原宿) 米軍宿舎の庭園であった。

終戦後昭和 21 年から国民体育大会が開催されることになったが、日本洋弓会は、京都 (第 1 回大会、昭和 21 年)、名古屋 (第 5 回大会、昭和 25 年)、広島 (第 6 回、昭和 26 年)、郡山 (福島県、第 7 回大会、昭和 27 年) などの国民大会には、日本弓とともに参加した。そのうち、昭和 25 年 10 月 30 日に行なわれた、名古屋大会の第 2 日目 (市内清水公園会場) には、日本洋弓会の米人会員ミス・ヘレン・ラスキー

も出場して、72 点の最高点で優勝した。そして翌日の中部日本新聞には「洋弓に狩猟姿でラスキー嬢出場」という見出しで、「ハカマ、白タビ姿というクラシカルな婦人選手（日本弓）も交って、熱戦を繰り広げる国体弓道第二日目の 30 日は午後 1 時から珍らしい洋弓の公開演技が行われた。アメリカにいて、N. A. A.（全米洋弓協会）の婦人チャンピオンで知られ、弓道の国際オリンピック参加運動にも活躍、現在総司令部（G. H. Q.）運輸課勤務のヘレン・ラスキー女史が革の矢筒（クイバー）に短い矢を抱え、狩猟姿そっくりのいでたちで出場、洋弓の菅重義氏（日本洋弓会会長）らと競射を行い、72 点の最高点で鮮やかな手並を披露、選手はじめ観衆の拍手を浴びてほほえましい日米親善風景を描いた。」という記事が載せられた。ついでながらこの日の日本弓試合に出場した 3 人の女子選手がいたが、これは昭和 13 年に行なわれた第 1 回日米親善通信女子競技大会に出場した愛知県立第一高女の鈴木歌子選手等で、試合終了後 12 年前の想出話に尽きることがなかった。

第 7 回国民大会の秋季大会は福島、山形、宮城県などで行なわれ、昭和 27 年 10 月の郡山弓道会場では、公開演技として、フィールド・アーチェリーが披露された。場所は平坦なグラウンドであったので、机や椅子を運んで、仮想の丘や谷間での競射という形式であった。

昭和 27 年 5 月に日本で最初の洋弓についての解説、指導書が菅重義、小沼英治共著で「洋弓の解説」という書名で発行され、当時アーチェリーに志すものには唯一の手引書として珍重された。

(4) 日本アーチェリー協会と改称……普及発達期

昭和 32 年 10 月 19 日に、民族文化協会（会長渋谷一雄）主催、日本洋弓会、日本武術研究所、読売新聞、東急電鉄後援の第 7 回民族武道の祭典が、大田区田園調布の田園コロシウムで開催された。各種日本古来の武道とは大分異色と思われる洋弓もこの祭典に初めて参加したので参加者の注目をひいた。洋弓部門から出場したのは、菅重義、小沼英治、飯田有正等のほか、アメリカ人の日本洋弓会員であった。

観衆の中には、当時まだ洋弓の射法を見たこともない人が多く、コロシアムに集まった観衆は好奇の眼で注目した。渋沢会長の挨拶の後、菅選手を先頭に全選手が場内のパレードをなし、菅洋弓会長が、洋弓についての解説をし、小沼、飯田両副会長のフィールド・アーチェリーの実演を公開した。種々の動物を象った標的が場内に設けられ、二人はそれを次ぎ次ぎと射て満場の拍手を受け、ターゲット・アーチェリーでは出場者全員五色の標的に的中して、洋弓の的中率の安定さを見せて大いに面目を施したのであった。

このようにして、追ひ追ひ普及発展してきた日本の洋弓界は、時代の進展に伴って従来の日本洋弓会なる名称を昭和 31 年に「日本アーチェリー協会」と改称し、小沼英治が理事長となった²³⁾。

昭和 34 年小沼は菅等とはかり、役員会を開き、協会長として日本楽器社長の川上源一を推すことにした。同年 6 月、銀座ヤマハ屋上において、初代川上会長の就任披露式を催し、この席上で川上会長は、弓場の拡張、指導者の養成、国際試合への出場等将来の抱負を披歴した。菅重義は顧問に就任した。こうして発足した日本アーチェリー協会は、川上会長の熱意と小沼副会長以下協会役員の協力体制のもとに、全国各地に支部をつくり、指導者養成の講習会、普及講習会、各種大会などと普及発展に邁進した。また同じ年に、東京教育大学、日本大学、学習院大学、玉川大学の 4 大学がアーチェリーをはじめ、この 4 校がまとまり日本学生アーチェリー連盟を結成し、初代会長に日本体育大学長の栗本義彦が就任した。その結成式は、上野池の端のホッケー倶楽部で 4 月に行なわれた²⁴⁾。

こうしたことからみると、昭和 34 年は日本アーチェリー界にとっては画期的な年であった。この年 4 月 10 日は皇太子、美智子妃の御成婚の日でもあったが、記念すべきこの日に、日本洋弓会は、第一回全日本アーチェリー競射大会を目白の学習院大学グラウンドで開催した。菅会長が挨拶をなし、その後、アメリカン・ラウンドで競射が開始され、従来熱心に研究練習に励んだ甲斐あって小沼英治が優勝した。

昭和 35 年 6 月には、鎌倉の七里が浜ホテルの射場で、全国的な第

1 回洋弓講習会が催され、同年 9 月には、奈良県橿原神宮外苑弓道場で第 2 回洋弓講習会を行なった。受講者は日本弓の称号をもつ人、学校体育指導者、学生などで、北は青森から南は九州までの各地から 60 余名が集まり全国普及の基礎が着々と進められた。

同年第 1 回アーチェリー選手権大会が東京後樂園にて開催され、翌年オスローで開かれる第 21 回世界アーチェリー選手権大会への出場者を選考した。

その結果、昭和 36 年 8 月、ノルウェーでの世界アーチェリー選手権大会には、日本ではじめての選手として、興亜石油の亀井俊雄、日本楽器浜松本社の岸野計二、学習院大学学生の入江隆の 3 選手と監督として協会理事の小山高茂、マネージャーに日本弓道連盟常任理事の金子清則、チーム・ドクターとして小野忠彦医学博士を派遣した。この 3 選手は世界の強剛 126 名を相手によく健闘し、亀井選手は日本新記録を樹立して 55 位、岸野選手は 66 位、入江選手は 70 位の成績であった。この道の先進国に交って、わずか 3 年足らずの弓歴でこれだけの成績は予期以上のものであった。団体成績は男子 15 ヶ国中 13 位であった。

昭和 37 年 8 月、インドネシアのジャカルタで開催された第 4 回アジア競技大会の洋弓選手として、日本から岸野計二、関西大学々生の山本博之、大阪府立大学々生の末田実の 3 選手と協会理事猪俣興一が派遣され、末田が見事に優勝し、2, 3 位は山本、岸野が占め、日本は完全優勝をとげた。

同年に、第 1 回全日本雪上アーチェリー競技大会が、新潟県塩沢で開催され、男子では川上浩、女子では川原好子が優勝した。

昭和 38 年 7 月の第 22 回世界選手権大会は、フィンランドのヘルシンキで開催され、細井英彦監督以下、猪股英毅（慶応大卒）、末田実、岸野計二、寺田五郎（日本楽器）の 4 選手が参加し、猪俣選手は 24 位となり団体の順位は第 10 位であった²⁵⁾。

昭和 38 年 7 月に東京の 4 大学（教育大、日大、学習院大、玉川大）が、日本学生アーチェリー連盟を結成したことは前述したが、その後関東

の大学洋弓は徐々に普及発展して対抗試合も盛んになった。これに対し昭和 36 年 4 月に関西学生アーチェリー連盟ができ、同 39 年には中部学生アーチェリー連盟も結成されたので、これらを全部結合して、全日本学生アーチェリー連盟が結成されるに至り、インターカレッジ・リーグ戦が盛んになった。この学生アーチェリーの発展に特に尽力したのは入江隆（学習院大）、高柳憲昭（東京教育大）等であった。

昭和 39 年（1964）は東京オリンピックの年であったが、その直前には、東京小金井公園にて日比親善洋弓大会が開催され、日本側が大勝した。また、オリンピック大会直後のパラリンピック東京大会アーチェリー競技の運営はたいへん優秀であるとして参加各国より賞賛され、日本のアーチェリーも世界の水準に近づいてきたことを確信づけるに至った。

この年には FITA（国際アーチェリー連盟）会長、英国のフリッツ女史は、副会長、ベルギーのケッセル氏とともにわが国のアーチェリー界を視察した。

同 39 年には東京都体育協会の趣旨により、東京都アーチェリー協会が成立し、会長に出口林次郎、理事長は田中良一、副理事長に猪俣興一、常任理事に細井英彦、伴七三雄、板井一雄以下 18 名が役員として就任し、各区ごとに協会が設置されて普及に役立った。

昭和 40 年には、フィリピンのマニラにて、第 1 回アジア・アーチェリー大会と日比親善大会が開催され、日本から小沼英治を監督として選手 8 名を派遣した。

また同年、インドネシア独立 20 周年記念アーチェリー競技会がジャカルタで開かれ、小沼英治監督と男子 4 人女子 2 人の選手が参加して、圧勝した。

昭和 41 年 3 月には、充実して来た日本のアーチェリー界を統一するため、全日本洋弓協会、日本学生アーチェリー連盟を統轄して、「全日本アーチェリー連盟」が結成され、会長に愛知揆一、理事長に田中良一が就任した。

したがって、連盟の傘下には、全日本学生アーチェリー連盟はもち

ろん、都道府県アーチェリー協会が入ったことになる。

ついで昭和 44 年には、日本体育協会に仮加盟し、国際アーチェリー連盟の加盟権を日本弓道連盟からうけついだ。日本体協に正式加盟したのは、昭和 45 年 7 月 10 日である。

昭和 41 年 8 月に、東京駒沢グラウンドにて日比親善大会を開催し、日本側が圧勝した。

昭和 42 年 7 月にオランダのアメルスフォルトにおいて、第 24 回世界選手権大会があり、細井英彦監督と選手 7 名（末田、前田、木村、円城寺、松島、塩屋、和弓の宮田）が参加し、団体 7 位（参加 47 国）、個人では末田選手が 24 位、前田 27 位、円城寺 29 位となった。

1969 年（昭和 44 年）8 月、アメリカ、ペンシルヴァニア州ヴァレーフォージにて開かれた第 25 回世界選手権大会に山田団長、高柳監督、高橋マネージャーと男子 5 名（前田、村上、木下、道永、川西）、女子 3 名（西、谷、平田）を派遣し、男子は団体 8 位、女子は団体 7 位、個人では女子の谷まゆみが 5 位入賞と、70 m ダブルラウンドに世界新記録樹立、西由利子が 27 位、平田正代は 35 位、男子個人では、村上清美 21 位、前田栄一郎 37 位、川西大介 41 位、道永義利 53 位、大下太一 78 位となった。

昭和 46 年イギリスのヨーク市で開催された第 26 回世界選手権大会から 35 ケ国が参加し、日本から男子 5 名（前田、梶川、中本、村上、若槻）、女子 3 名（布浦、渡辺、中島）が出場し、団体で男子 7 位、女子 9 位となり、個人で梶川が 5 位に入賞した。

この年の国内予選で中本新二選手は 1252 点という世界新記録を出したが、この記録はその後デンマークのジャコブセンが 1254 点で破っている²⁶⁾。

(5) 日本のフィールド・アーチェリー

アーチェリーを競技形式上から分類すると次のようになる。

アー チ ェ リ ー	{	ターゲット競技 Target archery	F. I. T. A. ラウンド { シングルラウンド { ダブルラウンド Federation International Tir à L'arc (国際弓術連盟)
		フィールド競技 Field archery	アメリカンラウンド ²⁷⁾ 16)
			コロンビアラウンド ²⁸⁾
			ヨークラウンド ²⁹⁾
フライト競技 ³²⁾ (Flight shooting 速矢)	ナショナルラウンド ³⁰⁾		
クラウト競技 ¹⁴⁾ (Claut shooting)	メトロポリタンラウンド ³¹⁾		
		フィールドラウンド	
		ハンターラウンド	
		アニマルラウンド	

ターゲット競技の FITA ラウンド (国際弓術連盟ラウンド) では、1 回に 1 組 6 本の矢を射つことを 1 エンド (end) と言い、各射程距離 (男子は 90, 70, 50, 30 m, 女子は 70, 60, 50, 30 m) から 6 エンドすなわち 6本×6エンド×4射程距離=144 本の矢を射つことになり、的は同心の、10 の輪からできていて、金星 (黄色の内側) が 10 点、以下 1 点宛減じて、1 番外の輪は 1 点となり、最高得点は 1440 点となる。この射ち方をシングルラウンドと称し、これを 2 回連続して行なうものをダブルラウンドと言い、この場合は 2880 点満点となる。1 ラウンドは 1 日または連続 2 日にわたって行ない、2 日にわたる場合は長い方の 2 つの距離を第 1 日に行なう。故にダブルラウンドでは 4 日間連続競射となるので精神的な訓練が必要となってくる。

アメリカには、その成立や発達過程上、最も古いものの一つヨーク・ラウンドから統一的なアメリカンラウンドに至るまで各種の射法がある。

フライト競技²⁷⁾は、矢がどのくらい遠くまで飛ぶかという最大飛行距離を競う競射で特殊なものとしては足を使って引く弓もある。これは日本ではまったく行なわれていない。

クラウト競技は、インディアンのような競技で、これも日本で

はやっていない。

フィールド・アーチェリーは、自然の広い高原や山野に的を 14 個、または 28 個設置し、最短 6 m から最長 60 m の距離で、山、川、谷などの変化あるコースを通りながら自然の環境の中で行なうものである。従来日本ではあまり盛んでなかったが、最近各地にこのコースが設備され、将来フィールド人口が増加するだろうと予想されている。

フィールドラウンドは的の距離が定まっているが、ハンターラウンドは的の位置かえで距離をわからなくしておく、したがって試合前には射場には入れないことになっている。また射法には 2 通りあり、一つは弓に目印や照準器、スタビライザー (Stabilizer 安定器) をつけるなど、どの方法で射ってもよいフリースタイルと、他はそうしたものを一切つけてはならないベアボウスタイル (Bare bow 裸弓を使用するもので Instinctive style, 自然型ともいう) とがある。

アニマルラウンドは、動物の型を描いた 14 個の標的を野外で射る方法で、動物愛護の精神から狩猟の代用の形で考えられたもので一発必中決して失敗が許されないというスリルを味わう興味あるものである。

このほかにアーチェリーを楽しむ方法として、ウォンド・シューティング (Wand shooting), アーチェリー・ゴルフ (弓矢を使ってゴルフと同じ要領でコースを少ないショットで回る、最後はホールの代わりに 4 インチの標的か球状の的を置く), ロウピング・アーチェリー (Roving archery), スキーイング・アーチェリー, 馬上アーチェリー, フィッシング・アーチェリー, ハンティング・アーチェリー, インドア・アーチェリーなどもある。

さて、フィールド・アーチェリーは、もともと、スウェーデンで動物愛護の立場から山野で鳥獣を射殺ろす代りに動物を描いた標的の急処をねらい射つことから始まったといわれ、英国でも、すでに 1591 年には、ロンドン郊外のスパイテル・フィールドでロウピング・アーチェリー (Roving archery) として行なわれたのが起源のようである。そして 19 世紀の後半には、騎士間 (Knight hood) でこのフィール

ド・アーチェリーが盛んであった。アメリカでのアーチェリー界は、ターゲット・シューティングとともにフィールド・アーチェリーがたいへん盛んで、最近では後者が前者をしのぐ勢で、アーチャー人口の80%まではフィールド・アーチェリーを楽しんでいるといわれている。1969年には第1回フィールド世界選手権大会がアメリカで行なわれている。

ターゲット・アーチェリーは、弓場において的を射るだけなので、どちらかといえば単調だとそのしりはまぬかれない。それに比して、フィールド・アーチェリーは、弓の本来の目的である山野を跋涉して狩猟をするという要素を多分に残し、変化に富み、都塵を離れて自然に親しみ、野趣とバイオニア精神を充分味わうことができ、原始的郷愁をよび起こさせるものがある。

日本では、昭和22年10月、埼玉県朝霞キャンプ・ドレークの一隅にある起伏の多い森の中で、駐留軍の弓人やその家族達と、日本側の菅重義、小沼英治、飯田有正、大塚栄治、小川弥市、吉田謙治ら10余名が参加して行なったのが、フィールド・アーチェリーの嚆矢である。その後昭和27年の10月、第7回国民体育大会の時、福島県郡山の会場で、フィールド・アーチェリーのエキジビション・ゲームが公開された。

昭和39年5月には、伊東国際ゴルフ場のアーチェリー弓場において、第1回全国フィールド・アーチェリー大会が開かれ、この頃から、本格的なフィールド・アーチェリー射場ができはじめ、クラブも作られた。

昭和42年4月23日には、その発展をはかるため、発起人30余名が集まり、準備を整え、会則を定め、日本フィールド・アーチェリー・アソシエーション(J.F.A.A.)は同年8月10日に創立された。

最近では全国各地に、フィールド・アーチェリーの射場ができ、その人口も急激に上昇して、将来の発展は明らかである。昭和47年6月には全日本主催の第1回日本フィールド・アーチェリー大会が開かれ、多数の選手が参加した。

VIII. むすび

アーチェリーは、古くて新しいスポーツであるということが出来る。弓の歴史の項でも述べたように、弓矢の発明は人類発生後間もなくだろうと推定され、その後、人類の生活必需品として、動物との戦いあるいは漁猟の主要用具として、また他民族との戦いの武器として重要な役割を果たして来た時代もあったが、現代の文明国においては、まったくスポーツとして、しかも用具は合理的に工夫改良され、近代的、科学的しかも美的に作られ、すぐれた性能のものが使用者を楽しませるにいたっている。

そして、体力に応じた強さの弓が自由に選べるようになり、老若男女を問わず誰でも気軽にできるスポーツとなった。

アーチェリーの技術は、日本弓のような形式ばった堅苦しさはなく、フランクで一般にたいへん入り易く、すぐ興味を覚え、魅力にとりつかれるスポーツである。初心者でもときどき金的を射とめる快感を味わうこともできるが、メンタルな所が多分にあり、技術の奥行きは深い。最短射程距離の 30 m から 6 エンド (1 エンドは 6 射) の 36 射全部が中央の 10 点に当たる、いわゆるパーフェクトを出した人はまだ世界中に誰一人もいないのである。

大試合ともなれば、1 日に 6 時間以上もの長時間、炎天下の中、連続して 4 日間に 288 本の矢を射ることもある。こうなるともう自分のとの戦いあるのみで、誰の助けを借りることもできない。これほど孤独なしかも精神的にきびしい競技も少いのである。これがまた競技者にとっては、一つの魅力でもある。

弓をやる目的は、いろいろあろう。すなわち、健康のため、自己の限界を知るため、的に命中した時の自己満足のため、精神を鍛えるため、社交のため、よい友人を作るため、スポーツをするよろこび、楽しみ、趣味、国際選手となって自分の力を試して見たい等々、それぞれ異なるかも知れないが、その何れでもよい、目的に立ち向って精進する過程が尊いのである。

日本でのアーチェリーは、昭和 12 年頃からで、スポーツの中では、最も新しい歴史しかもっていない。しかも、はじめた直後、戦争で中断され、実際に普及しはじめたのは、各大学に洋弓部がおかれた昭和 30 年以後である。したがって揺籃期を脱して成長期に入ったのは、昭和 40 年以後で、日本では、これからのスポーツである。ゴルフ、ポーリングの後を継いで一般的に広まるのは、将にこれからである。人によっては、静かなブームがすでに巻き起こっているとも述べている。

全国にアーチェリー協会が 40 余も設立され、レンジが 200 以上もできている。都市の公害を逃れ、山野の大自然の大気の中でフィールド・アーチェリーに打ち込み、仕事の合い間の一時を過ごす人達が多くなるのも遠い将来ではあるまい。

IX. アーチェリー解説年表

- | | |
|--|--|
| 10 万年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・考古学者達の研究によれば、ネアンデルタール (Neanderthal) の、ある種族達は、この頃すでに弓矢を狩猟に使用していたと推定されている。 |
| 5—3 万年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・Encyclopedea Britanica によれば、弓の発明は、おそらく 5—3 万年以前であろうという。 |
| 3—1 万年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・人類が弓や投槍を発明したのは、この頃すなわち後期石器時代であろうと、英国の先史考古学者 Vere Gordon Childe は推定している。 |
| 25000 年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ大陸南部を放浪していた Folsom 人は、この頃優れた狩猟人で荒野の野牛を射とめていたと推定される。このことは、アメリカ野牛の肋骨の中に射ち込まれた石の跡によって確認されている (1925年に彼等の用いた器具が Folsom から発見されている)。 |
| 1 万数千年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・Altamira 洞窟に残されている壁画 (かなり発達した弓をひいている) は約 1 万数千年前のものと推定されている。この洞窟の発見は 1879 年。 |
| 1 万 5 千年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・この頃、南フランスに存在していたオーリナシアン (Aurignacians) 民族が、最初に弓矢を使ったのだらうと (P. R. Elmer 博士の調査による) いう。 |
| 7000 年前 | <ul style="list-style-type: none"> ・エジプトで 7000 年前のものとして推定される弓矢が発見されている。エジプトは Pharaoh 時代弓を最有力の武器として兵を訓練していた。 |
| B. C. 4000 年 | <ul style="list-style-type: none"> ・中近東、アジア民族等は、この頃弓矢を盛んに使用していた。 |
| A. D. 1200 年頃 | <ul style="list-style-type: none"> ・モンゴル族のジンギスカンは馬に乗った軍隊に弓をもたせ、その馬上の射手の偉力で多くの敵に大惨害を与えた。 |
| 1360 年 <small>(後村上天皇
延文⁵)</small> | <ul style="list-style-type: none"> ・イギリスで軍隊に馬上から弓を射させた結果、従来の射程距離を 400 フィートから 700 フィートに延長させることができた。このことによりその後の戦いにおいて (百年戦争 1337—1453) フランスの大軍に大打撃を与えることができた。 |
| 1538 <small>(後奈良天皇
天文⁷)</small> | <ul style="list-style-type: none"> ・英国のヘンリー 8 世は、従来狩猟や武器に使われていた弓矢をスポーツ化し、アーチェリー競技会を開いたので、ヨーロッパ各国にも広く普及するようになった。 |

- 1545 (後奈良天皇
天文 14) ・英国で Ascham, Roger によって世界最初のアーチェリーの書が「Toxophilus」の書名でロンドンの A Murray & Son から発行された。ギリシャ語で Toxo は弓の意がある。したがって「弓術愛好」とでも訳すべきか。168 頁の大作。
- 1588 (後陽成天皇
天正 16) ・スペインの無敵艦隊アルマダ (Armada) は弓矢が武器であったが、英国侵寇作戦で、ハワード卿、ドレーク等の指揮による銃砲の英国艦隊に惨敗した。この時以後弓は武器としての価値を銃砲にゆずり第 2 位におちた。
- 1630 (明正天皇
寛永 7) ・フランスではこの年の内部闘争で弓矢が使用されたが、このあとは兵器として、弓は火器に優位をうばわれた。
- 1673 (靈元天皇
延宝元) ・英国で、はじめて愛弓家のグループ「Ancient Scorton Arrow」が結成され、世界最古のアーチェリー・コンテストが開かれた。
- 1676 (延宝 4) ・英国のチャールズ 2 世は、アーチェリーをスポーツとして奨励したので、ヨーロッパにも広く受け入れられた。その妃 Catherine of Braganza (ポルトガル王ジョン 4 世の娘) も、自ら弓を愛し、クラブの結成を熱心に奨励した。
- 1682 (天和 2) ・弓に関する第 2 番目の著と見られる「弓人の栄光 The Bowman's Glory」という書が、フィンスベリー弓人会の会計役 William Wood によっても出版された。この書の序文の中に、チャールズ 2 世が弓術を実習したことを暗示する一文がある。
- 1703 (元禄 16) ・スコットランドの「王立弓人協会」は、この年にアン女王 (Queen Anne 1665—1714) から法人として認可された。
- 1787 (天明 7) ・この年 6 月 18 日英国に「愛弓者協会 Society Toxophilite」が結成された。
- 1793 (寛政 5) ・前記「愛弓者協会」はジョージ皇太子の庇護を受け、「Society Royal Toxophilite 王立愛弓者協会」と改称した。
- 1796 (寛政 8) ・「王立ケント弓人会」もジョージ皇太子の庇護により王立の名称をつけ加えた。
- 1824 (文政 7) ・英国のヨークシャーに「サースク Thirsk 弓人会」が結成された。

- 1825 (文政 8) ・オックスフォード大学内に「ニューカレッジ弓人会」が誕生した。
- 1827 (文政 10) ・英国のサセックス Sussex に「南サクソン South Saxon 弓人会」が設立された。
- 1828 (文政 11) ・アメリカ合衆国に、はじめて洋弓の同好会「フィラデルフィアの連合射手 The United Bowmen of Philadelphia」が組織された。これで洋弓がアメリカにおいて第一歩を踏み出したことになる(9月3日)。
- 1830 (天保元) ・上記弓人会「U. B. H.」は「弓人要覧」という本をはじめて出版した。
- 1844 (弘化元) ・ビクトリア女王は、かつてチャールズ 2 世が属していたブルージュ Bruges (ベルギー) の「聖セバスティアン友愛会」の会員になった。
- ・8月1日「The Grand National Archery Tournament」大国民弓術選手権大会が、ヨーク州のネービスマイヤー Knavesmire 競馬場で開催された。
- 1849 (嘉永 2) ・英国で婦人のためのナショナル・ラウンド National Round が創設され(60ヤードで4ダース, 50ヤードで2ダースを射的), ダービーで第1回大会が開かれた。
- 1860 (万延元) ・英国のバス Bath 町で開かれた大国民競射大会に参加した弓人は男子 109 人, 婦人 99 人で, 当時の最高を記録した。
- ・この年, 中国のタークー (大沽 Taku) で起こったアロー戦争 (1857—60, アロー号事件とも第二次阿片戦争とも呼ばれる清対英仏連合軍の戦い) は, 大戦で弓矢を使用した最後で, 以後兵器としては廃れた。大沽は当時天津の外港として栄えていたが, 現在は堆土のため大型船接岸不能となり, 対岸に拡張された塘沽にその地位をゆずった。
- 1861 (文久元) ・英国に「大国民弓術協会 The Grand National Archery Association」が設立された。
- 1870 以後 ・アメリカの南北戦争 (1861—65) 頃衰微していた米国の弓術は 1870 年代になって社交スポーツとして復活された。
- 1877 (明 10) ・米国のモーリス・トンプソン Maurice Thompson は弓に関する自分の経験を「Harper's Magazine」に

- 執筆し、それをまとめて「The Witchery of Archery 弓術の魅力」として出版した。
- 1879 (明 12)
- ・スペインのアルタミラ洞窟 (Cave Altamira) で彩色動物壁画が発見、旧石器時代に弓矢が使用されていたことが実証された。
 - ・1870 年頃から盛んになった米国の洋弓は、クラブが 100 位に達し、これらを統合する協会が必要となり「合衆国民弓術協会 The National Archery Association of The United States」が設立、ボストンに本部をおき、8 月にその第 1 回競射大会が、シカゴのホワイトストックキング公園で開催、男 69、女 20 人が参加した。
- 1888 (明 21)
- ・英国で弓矢が戦争に使われた最後である。この年 Macdonald 一門と Macintosh 一門との衝突に使われた。それ以後はアメリカインディアンやアフリカの野蛮な種族が僅かに弓を使用したのみ。
- 1900 (明 33)
- ・第 2 回オリンピック・パリ大会にアーチェリーが公開競技として行なわれた。
- 1904 (明 37)
- ・第 3 回オリンピック・セントルイス大会の時もアーチェリーが行なわれた。
- 1908 (明 41)
- ・第 4 回オリンピック・ロンドン大会のアーチェリーは正式種目として、英仏各 15 人、米 1 人の選手が出場した。
- 1913 (大 2)
- ・米国の N. A. A. (The National Archery Association 国民弓術協会) で、はじめてウォンド・シューティング (Wand Shooting—注 13 参照) が行なわれた。
- 1914 (大 3)
- ・この年英国では公開の競射大会が 5 回も開かれたが、以後は第 1 次世界大戦勃発のため暫くは衰退した。
- 1919 (大 8)
- ・第 1 次大戦終結後、英国で、この年から弓術が行なわれはじめた。
- 1920 (大 9)
- ・第 7 回オリンピック・アントワープ大会に、標的競技として弓術試合が種目に加わった。
- 1922 (大 11)
- ・米国の N. A. A. では、クラウト競射 (Clout Shooting 注 14 参照) を始めた。
- 1925 (大 14)
- ・アメリカのフォルサム (Folsom) 地方で、米大陸最古の文化と思われる約 1 万年前の狩猟民族の使用器具

- を発見、野牛の骨に射込まれた鏃などを発掘し、当時の弓矢の使用が実証確認された。
- 1929 (昭4) ・ N. A. A. (全米洋弓協会) の調査によれば、この頃、アメリカの社会人洋弓のクラブ数は 149。弓人の総数は約 15 万人と発表された。
- 1931 (昭6) ・ ポーランド弓人たちの提唱により、国際洋弓連盟 (Federation International de Tir a l'Arc. 略称フィーター FITA) が結成され、第 1 回大会 (World Championship) が開かれた。
- 1932 (昭7) ・ 英国では、国際関係の事柄につき大英帝国の弓人総体を代表する団体の必要を認め、国際弓術評議会 (GCLA) が結成され、会長にリーベルストーク Lord Revelstoke 卿を推し、8 弓団から委員を選出した。
- ・ 第 2 回世界洋弓競技大会が、ポーランドのワルシャワで開かれ、この時、競技に関する各国の方法を統一した規約が定められた。(32 人出場、ベルギー 3、チェコ 3、英 8、仏 4、ポーランド 13、瑞典 1)
- ・ 11 月 29 日ニューヨークの日本倶楽部において日米の弓人が懇親会を開いた。日米弓人の交流のはじまりである。
- 1936 (昭11) ・ 5 月 15 日マウント・ホリヨーク女子大で行なわれた運動会に日本女性 2 人が和弓の実演を紹介した。
- ・ 10 月 17 日、第 1 回日米親善競技大会がウッドサイドで行なわれた。
- 1937 (昭12) ・ 3 月 6 日、ニューヨークの日本弓道会は、紫垣元喜が全米洋弓協会 (NAA) に加盟することを承認した。
- ・ さらに日本人の洋弓同好会を結成した。
- ・ この年から米人の洋弓大会に日本人も招待されて参加するようになった。
- ・ 10 月、日米親善通信競技大会が開かれた。
- 1938 (昭13) ・ 10 月 2 日に日米女子親善通信競技大会が開かれた。
- 1939 (昭14) ・ 米国でアーチェリーをやった菅重義が帰国し、日本に紹介した。
- 1940 (昭15) ・ アメリカでナショナル・フィールド・アーチェリー連盟が創立された。
- 1941 (昭16) ・ 菅重義が同好者を集めて、ロビンフッド・クラブを東京に創設したが、第二次大戦のため中止せざるを得な

- かった。
- 1945 (昭 20) ・終戦直後小沼英治は自宅に洋弓研究所の看板を出し研究を続けた。
- 1946 (昭 21) ・9月に小沼英治は株式会社アサヒ弓具を創立し、弓具の製造を始めた。
 ・11月小沼の提案により主にアメリカの同好者を集めて「日本アーチェリー・アソシエーション」をつくった。
- 1947 (昭 22) ・菅が会長となり、下条康磨らの協力を得て「日本洋弓会」を設立し(3月)、これに前記「日本アーチェリー・アソシエーション」も合流して統一的機関がこの年の年末に誕生した。
- 1948 (昭 23) ・「日本洋弓会」の主催で駐留軍のアーチャーを招き、日米対抗試合を豊島区の総合運動場で開いた。
- 1952 (昭 27) ・昭和21年以來の国民体育大会にアーチェリーも参加していたが、この年10月福島県郡山で行なわれた弓道会場では公開演技としてフィールド・アーチェリーを披露した。
 ・日本で最初の洋弓の著書「洋弓の解説」が菅、小沼の共著で出版された。
- 1956 (昭 31) ・「日本洋弓会」は「日本アーチェリー協会」と名称を改めた。
- 1957 (昭 32) ・10月19日第7回民族武道の祭典が田園コロシアムで開かれた際、アーチェリーも参加し、解説と命中率のよい実演を披露した。
- 1958 (昭 33) ・全日本弓道連盟が国際弓道連盟に加入した(7月)。
- 1959 (昭 34) ・日本アーチェリー協会は菅が顧問となり、日本楽器社長の川上源一が会長、小沼が副会長以下役員体制をかため、指導者の養成、国際試合参加、普及講習会等事業内容を発展させた。
 ・日本学生アーチェリー連盟を結成、東京教育大、日本大、学習院大、玉川大が加盟し、栗本義彦を初代会長に推した。
 ・第1回全日本アーチェリー競射大会を学習院大グラウンドで開いた。(4月10日皇太子美智子妃御成婚の日)
 ・国際選手権大会はこの年以後は2年に1回大会を開くことになった。

- 1960 (昭 35)
- ・ 6月に全国的な第1回洋弓講習会が鎌倉で、9月には第2回目が樫原神宮外苑弓道場で開かれた。
 - ・ 第1回全日本アーチェリー選手権大会を東京後楽園で開き、翌年の第21回世界アーチェリー大会への出場者を選考した。
- 1951 (昭 36)
- ・ 8月オスロで開かれた第21回世界アーチェリー選手権大会に亀井俊雄 35位、岸野計二 66位、入江隆 70位を送り、男子団体 15ヶ国中、13位であった。(出場選手 126名)
 - ・ 関西にも学生アーチェリー連盟が結成された。
- 1962 (昭 37)
- ・ 第1回全日本雪上アーチェリー競技大会が、新潟県塩沢で開かれ、男子は川上浩、女子では川原好子が優勝した。
 - ・ 6月17日全日本学生アーチェリー王座決定戦が、関西学院大洋弓場で開かれ、関西大が優勝した。
 - ・ 8月27,28日第4回アジア競技大会がジャカルタで開かれ、日本の末田が優勝、山本、岸野が2,3位と続き、団体優勝とともに完全優勝した。
 - ・ 関東学生連盟が結成された。
 - ・ 9月1,2日全日本学生アーチェリー個人選手権大会が、小石川サッカー場特設射場で開かれ、関学大の岡橋が948点で優勝、女子は日本女子大の林洋子が725点で優勝した。
- 1963 (昭 38)
- ・ 6月17,18日に第2回全日本学生アーチェリー王座決定戦が、東京浜田山グラウンドで開かれ、関西大が優勝し、2位は学習院大であった。
 - ・ 第22回世界選手権大会が、ヘルシンキで開かれ、猪股、末田、岸野、寺田の4選手が出場、猪股は24位となり、団体順位では日本は10位であった。
- 1964 (昭 39)
- ・ 中部学生アーチェリー連盟が結成されたので、関東、関西と統合して、全日本学生アーチェリー連盟を組織し、全日本学生アーチェリー東西対抗第1回大会を開いた。
 - ・ 第18回オリンピック東京大会には正式種目に加えられそうになったが、その後の種目制限で、ハンドボールとともに除外される運命となった。
 - ・ 日比親善洋弓大会が、小金井公園で開催された。

- ・パラリンピック東京大会のアーチェリー競技の運営は各国から好評を受けた。
 - ・FITA 会長や副会長らが、日本アーチェリーの状況を視察した。
 - ・東京都アーチェリー協会が成立し、各区毎に協会を置き、普及に属した。
- 1965 (昭 40)
- ・第 1 回アジア・アーチェリー大会と日比親善大会に、小沼監督ほか 8 名の選手を派遣した。
 - ・インドネシア独立 20 周年記念アーチェリー競技大会に、男 4、女 2 選手をおくり圧勝した。
- 1966 (昭 41)
- ・社会人を主体とした「日本アーチェリー協会」と「全日本学生アーチェリー連盟」を統轄する上部団体として、3 月に「全日本アーチェリー連盟」が結成され、愛知揆一が会長に、田中良一が理事長に就任した。
 - ・全日本アーチェリー春季大会は、一般男、女、大学男、女、高校男、女と分れて行なわれ、合計 400 人を越す盛会であった。
 - ・6 月 26、27 日に第 5 回全日本学生王座決定戦と第 1 回全日本女子アーチェリー団体決勝戦が、京都府立大学植物園で開かれた。
 - ・8 月に日比親善大会が駒沢グラウンドで開かれ、日本が圧勝した。
 - ・11 月 19、20 日、全日本アーチェリー選手権大会が、駒沢総合運動場第 2 球場で開かれ、男子は末田実（静岡一般）、女子は川又千文（学習院大）が優勝した。
- 1967 (昭 42)
- ・第 24 回世界アーチェリー選手権大会がオランダのアメルスフォルトで開かれ、細井監督ほか 7 名の選手が参加し、団体 7 位、個人では末田 24 位、前田 27 位、円城寺 29 位となった。
- 1969 (昭 44)
- ・全日本アーチェリー連盟は、日本弓道連盟から国際弓術連盟への加盟権を譲り受け正式に加盟を認められた。日本体協には 7 月 10 日に加盟し、8 月に国際アーチェリー連盟に加盟した。
 - ・第 25 回世界アーチェリー選手権大会（ペンシルバニア）に、男子 5 名と女子 3 名の選手を派遣し、男子は団体 8 位、個人で村上 21 位、前田 37 位、川西 41 位、道永 53 位、大下 78 位、女子は団体 7 位、個人

1971 (昭 46)

で谷まゆみが5位と70mダブルラウンドに世界新を樹立し、西が27位、平田が35位となった。

・5月29日、第26回世界アーチェリー選手権大会予選会が、尾張旭市森林公園弓技場で開かれ、中本新二はシングルラウンドで1252の世界新記録を出した。50mでも320の世界新であった。女子では、渡辺佳代が1163の日本新記録を出した。出場者は男24、女11人であった。

・6月25日、全日本学生王座決定戦が神戸の王子競技場であり、男子は1位桃山学院大、2位早大、女子は1位学習院大、2位梅花大であった。

・7月28—31日まで4日間英国ヨーク市で開かれた第26回世界選手権大会に、日本は男5人、女3人の選手を派遣し、参加35ヶ国中、男子は団体7位、女子は9位、個人で梶川博(大阪工大)が2344で5位であった。女は布浦裕子(同大)が2180で18位となった。優勝は18歳のアメリカ選手ジョン・ウィリアムスが大会新2445、女子は、エマ・ガブチェンコ(ソ連)が(2380)占めた。

・10月15、16日全日本学生アーチェリー個人選手権大会が千葉県総合運動場で開かれた。

1972 (昭 47)

・長い間オリンピック大会種目から抜けていたアーチェリーが、第20回ミュンヘン大会で正式種目として実施され、日本から男子3人、女子1人が出場、2880点満点のところ梶川2381(19位)、日比野2344(29位)、中本2287(38位)、女子、秋山芳子2301(17位)であった。

注

- 1) Encyclopedia Japonica (大日本百科事典 I p. 260) に、日本には1937(昭和12年)紹介され……とあるが、その他の多くの書(100万人のアーチェリー p. 153, 図解コーチ・アーチェリー p. 32, 図解アーチェリー p. 27)には昭和14年紹介されたとある。この事についての詳細は、日本のアーチェリーの項を参照されたい。増補体育大辞典 p. 1598 には、洋弓がわが国にはじめて紹介されたのは昭和12年から14年にかけてであったが……とある。
- 2) Encyclopedia of sports (現代スポーツ百科事典) 1970, 日本体育

- 協会, p. 82.
- 3) Collier's Encyclopedia 1960, Vol. 2, p. 75.
 - 4) 図解コーチ・アーチェリー 昭 46. 高柳憲昭, p. 1.
 - 5) 100 万人のアーチェリー 昭 44. 板井一雄, p. 146.
 - 6) Encyclopedia Britanica 1964, Vol. 2. p. 292.
 - 7) 100 万人のアーチェリー 昭 44. 板井一雄, p. 147.
 - 8) Collier's Encyclopedia 1960, Vol. 2. p. 75.
 - 9) Collier's Encyclopedia 1960, Vol. 2. p. 75.
 - 10) 世界大百科事典 Vol. 22. 1969, 平凡社, p. 373.
 - 11) アメリカスポーツ史 昭 35. 山中良正, p. 57.
 - 12) 洋弓 昭 44. 菅重義, p. 160.
 - 13) Wand Shooting, Wand には, 棒, 杖の意があり, 幅 2 インチ, 長さ 6 フィートの板棒を的として立て, この板棒に 36 本の矢を放って射当てる競技, 男子は 100 ヤード, 女子は 60 ヤードの距離から発射することになっているが, 多少加減してもよい. 板的には, バルサの木が適している. それは矢が突きささったまま落ちないし, 跳ね返りも少いからである.
 - 14) クラウト競技 (Clout shooting) Modern Physical Education (Gerald J. Hase, Irwin Rosenstein 1966) p. 5 には, Clout shooting—Long range shooting at a 48 foot target laid on the ground; 180 yards for men, and 120 yards for women. と簡単に説明してある. クラウト競技は, 日本ではあまり行なわれていない. これはインディアンの得意とする競技で, 地上に 15 m (48 foot) の直径の円形標的を書き中心から外側へ 5 つの同心円の得点帯に区分し, それぞれの得点幅は 1.5 m となる. クラウト標的の中心には規定の大きさの白い三角旗を立てる. この標的を男子は 165 m (180 yards), 女子は 125 m の距離から 36 本の矢を射ち, 地上の的の中心から外側に 5, 4, 3, 2, 1 点の的中点によって勝敗をきめる. このほかにフライト競技 (Flight shooting) と称する最大飛行距離を争う競技もある.
 - 15) 菅重義…日本におけるアーチェリーの元祖, 明治 22 年 6 月 20 日香川県多度津町に生まれ, 大正 9 年 10 月, 読売新聞特派記者として渡米, コロンビア大学にて地方自治学専攻, ニューヨークの「日米時報」主筆, 基督教修道会幹事, 1937 年 (昭和 12 年) より 3 回に亘る日米親善競射大会に参画, 昭和 14 年 1 月帰国, 東洋医療機, 大和興業株式会社各代表取締役就任, 事業のほかに「ロビン・フッド倶楽部」を組織して洋弓の普及に第一歩を踏み出し, 昭和

- 22年3月「日本洋弓会」を創立し初代会長となる。その他「日本アーチェリー協会」「東京都アーチェリー協会」「日本フィールド・アーチェリー協会」顧問、「豊島区アーチェリー協会」会長等歴任。
- 16) アメリカン・ラウンド (American round) 国際ルールができる前に、アメリカでよく行なわれた試合の進め方、射距離は 60, 50, 40 ヤードの3種、各距離とも6射で、5回計 90 射、金色は9点、赤色7点、青色5点、黒色3点、白色1点の標的を用いる。このほかに、ナショナル・ラウンド、メトロポリタン・ラウンド、コロンビア・ラウンド、ヨーク・ラウンド、ジュニア・コロンビア、ジュニア・アメリカン等がある。これについては、注 (27), (28)—(31) 等を参照。
- 17) 矢渡式 (矢わたし式)
- 競射会とか弓道大会の時などに行なう最初の射礼をいう。また弓道場 (射場) を新築し、あるいは、射塚を新しく造った場合に行なうものである。古法に従えばなかなかやかましいもので、射場と射塚の飾付けをなし、前三隅に八幡櫓を設けて神酒および山海の珍味、山のものとして雉子鳥、海のものとして鯉を供える。祭主は祝詞をあげ、あらかじめ祭壇に供えた弓矢を3人の射手に手渡しする。渡された15本の矢を射手は7, 5, 3に引く、すなわち最初の1回は1番射手が3本、中2本、後が1本の計7本、第2回は、3本、1本、1本の計5本、第3回は3射手各1本宛の計3本である。中 (あた) りの多いほど目出度いのは当然だが、全部駄目の場合はさらに5, 5, 3と13射を射直す。略式の場合は祭主の一手の射礼等で簡単に済ます方法もある。
- 18) 洋弓 (Archery) 昭 44, 菅重義, p. 295.
- 19)_(A) 嘉納治五郎 昭 39, 加藤仁平, p. 237.
_(B) 嘉納治五郎 昭 39, 講道館, p. 745.
- 20) 洋弓 昭 44, 菅重義, p. 325.
- 21)_(A) 前出 18) p. 313.
_(B) 洋弓の楽しみ方 昭 42, 白倉伸助, 武山秀, p. 84.
- 22)_(A) 前出 21)_(B) p. 85.
_(B) 前出 5) p. 152.
- 23) アーチェリー 昭 47, 高柳憲昭, p. 27.
- 24) 洋弓 昭 44, 菅重義, p. 320.
- 25) 朝日新聞 昭和 38 年 7 月 18 日.
 洋弓の楽しみ方 昭 42, 白倉, 武山, p. 90.
 100 万人のアーチェリー 昭 44, 板井一雄, p. 153.

- アーチェリー 昭 46, 高柳憲昭, p. 35.
 スポーツ年鑑 昭 39, ベースボールマガジン社, p. 377.
- 26) アーチェリー 昭 47, 高柳憲昭, p. 205.
- 27) アメリカンラウンド……これはアメリカで最も盛んに行なわれている競技方法, 標的は 122 cm (直径) の大的を黄色 9, 赤色 7, 青色 5, 黒色 3, 白色 1 点とし射数は 6 本×5 回の計 30 射, これを 60 ヤード, 50, 40 の 3ヶ所から 30×3 の 90 射で 9 点×90 射= 810 点満点となる.
- 28) コロンビアラウンド……これは女子, 中級女子に使われるが, 初歩の男子大学生または男子高校生にも利用できる.
 50 ヤード射程, 4 エンド (6 本×4)
 40 ヤード 4 エンド
 30 ヤード 4 エンド
- 29) ヨークラウンド……男子用で最も古いものの一つで, 100 ヤード 12 エンド, 80 ヤード 8 エンド, 60 ヤード 4 エンド.
- 30) ナショナルラウンド……女子, 中級女子用 60 ヤード 8 エンド, 50 ヤード 4 エンド.
- 31) メトロポリタンラウンド……女子用 60, 50, 40, 30 ヤードから各 5 エンド.
- 32) フライト競技 (Flight shooting)
 これは, 矢がどのくらい飛ぶかを競う競技で, 射流し競技とでもいうべきものである. 矢は 6 射で, 競技は次ぎのようなクラスに分けて行なう.
 A. 標的弓クラス (ターゲット用の弓を使用する)
 B. 射流弓クラス (弓の中心部に穴のあいた特殊な弓を用いる)
 さらに射流弓クラスでは, 男女の重量別に分けている. 男子は 50 ポンド弓, 60 ポンド, 80 ポンド, 無制限弓, 足弓, 女子は 30 ポンド弓, 50 ポンド, 足弓に区別して行なう.
 発射線から 900 m の距離と, 矢が落下すると予想される着地地域は 200 m 以上の幅が必要で競技場の準備も容易ではない. 日本では全く行なわれていない. 矢は速く飛ぶように細く, 短かくなっている. 従来の世界記録は普通の射形では 783 m, 足を使って引いた場合は 958 m である.

(昭和 48 年 5 月 28 日 受理)